廣惠濟急方 下巻

横死之類
諸物入竅
中毒之類
婦人急證
小兒急證

武 5 0 2 9 上

9 八02 9止

圖目録

二丁 蒿雀 二十 小蒜ノビル 廿六 冬葵フユアフヒ カンアフヒ
廿六丁 葧臍クログワヒ 同 廿二 癩蝦蟇ヒキガヘル 廿九丁 箭頭草スミレ
卅 榎ノ木 卅六 栝樓 同上 冬蟲イナムシ 同上 雨蛤アマカイル
卅七 樟クス 五十 苦參クララ 同上 鰺アジ 有硬鱗カタキウロコ 眼子菜ヒルモ 五十四丁
十六 菖吾 又山ブキ 同上 酸模スイハ

岡氏藏書

廣恵濟急方下巻目録

横死之類 病によらずして死する類を茲に集む

煙薫死 一丁 けむりにまかれ死する物

餓死 三丁 食物なくして死するなり

縊死 四丁 くびをくゝりて死するなり

溺死 九丁 水におぼれて死するもの

凍死 十三丁 寒氣にこゞへ死するなり

雷震死 十六丁 いかづちにうたれ死するなり

諸物入九竅 目鼻口耳肛門陰門にもろもろの物入る類を並て集む

諸物入目 十七丁 目に物の入るなり

諸物入耳 二十丁 みゝに物の入たるなり ○鼻に物の入るを附す

誤呑銅鐵物 二十三丁 とうせんてつかね物などのむるなり

諸物哽咽 二十七丁 もろもろの物のんどにたつなり

卒食噎 三十丁 食物のんどにつまるなり

蛇入人耳口鼻肛門并婦人陰門 三十一丁

諸物入肉 三十二丁 とげをさしてたるなり

諸物中毒 もろもろのどくにあたりたるなり

中諸藥毒 三十八丁 もろもろの藥の毒にあたりたるなり

中諸穀菜毒 四十四丁 蔬菓菌蕈の毒にあたるを附ス

中酒毒 五十二丁 油并ニ塩の毒にあたる類附ス

中魚介禽獸肉毒 五十五丁 蟲の毒に中たるを附す 諸毒通療する方を附す

婦人産前急證 おなごのさんぜんの急なる病證を集む

胎動 六十二丁 くわいにんのおなごそのはらの内の子きりにうごくなり

胎漏 六十四丁 姙婦卒に産門より血下るなり

子癇 六十五丁 にんしんのおなご胎内の子むねをつきあげ歯がみしせむせうになるなり

姙婦腹痛腰痛 六十八丁 にんしんのおなごこしはらいたむなり

子鳴 六十九丁 子母の胎内にて鳴なり

臨産急證 さんよりかゝる時の急病どもこゝに載す

難産 七十丁 胞衣下ざるを附も

産後急證

血暈 七十五丁 ちのみちなり

崩漏 七十八丁 産して後俄におびたゞしく血おりるなりさん婦人にかぎらず平人も下るも此法よし

小兒急證 こどもの急なる病ども爰に集む

初生卒死 八十二丁 うまれおちたる子すぐに死するをいふ

撮口 八十二丁 うまれたる子ほうづきむし出る病云

臍風 八十五丁 うまれだちの子喘息して睨眼啼声出ざる病云

初生便閉 八十六丁 うまれだちの子大小便出ざるなり

初生丹毒 八十七丁 うまれだちの子惣身むらむらと赤くまだらになるなり俗にあかもがさと云是なり

初生口噤不開 八十八丁 うまれたちの子口をつぐみひらかざるなり

驚風 八十九丁 こどもの手あしひくつきひきつくるなり

走馬牙疳 九十二 はくさりはぐきたゞれておちてしまふなり

廣恵濟急方下巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡 挍

横死之類

煙薫死

けむりにふすぼり死するなり

凡火災等の節人烟に薫頭痛嘔吐し遂に迷悶えて死なんとするなり

療法 生萊菔根を嚼て其汁を飲下して

よし生なる者ありきとも児ハ莱菔子を水に研く其汁を飲でもし凡失火等の節ハ速に莱菔根一切をロに含バ烟中を奔走ても死を免

○又方葡萄を多く喫て死を免るべし 秋末葡萄を多く採く皮子を去火にかけ煉く砂糖又ハ蜜少し加へ膏となし貯置べし又甲州にハ葡萄膏又干葡萄あり預求貯をきてよし

○又方蒿雀 小鳥なり図説ハ次に出せり の黒焼たくはへあらバ莱菔汁に飲く最よし

○出火の節烟末又ハ烟の中へ行の里忍難きハ

急に地上に匍伏きて自己が口を以土地上へ呵のくれを極寒の節凍手を温がごとくすべし

蒿雀 和名 あをじ 又ちをしとも

大サ雀のごとし嘴短尾長し形ほそく長し頭と尾の付ぎハ淡青茶色にて羽黒くうれあらく雀の背色に似たり尾も黒く腹ハ淡黄色なり鵐ハ志とゞ此類にして青くなる也青志とゞと名く志とゞの類多し皆頭にかざしなり鵐ハのざしなし

餓死 うゑてしにたる事

人累日絶食饑困く死とするハ先飯を與喫すべからず若喫すれバ立処に死す且妄に服藥を用べからず

療法 手拭様の物を熱湯に浸し臍腹を熨バ自然と回生るべし其時白湯の中へ味噌汁又ハ米飲少しを冲て攪嚥しめ腸を滋潤し其後に熟ゑる稀粥を喫く両三日の間に段々其

粥を濃して食せ數日の後に軟飯を與へ喫せて
よし

凡飢人白菓を食しむるときハ死を慎べし

往歳或國に凶年ありて饑人秋より男女老幼
數人街頭に徘徊して後にハ飢困或ハ倒れ或ハ
匍匐徒に呼吸のあるまでなりしを行客中富商な
ど見るに忍ず食物を與へるに食物ハ大抵博飯なり
し其飯を喫せる人食しおはると頓に斃或ハ未
半も食せざるに手に持ながら死せしとなり是に與
る人と右の法を志らざる故なり惜むべし哀むべき
に至りするがや慈仁の心ありきども其術を志ら
ざれバあとりて人を害する事あり
茲に記して後人の鑑戒とす次

縊死 くびくゝりしたるもの

凡自縊人を救にハ必驟て先繩を截斷べからず
若妄に繩を截バ死を妄に繩を截斷ときハくりし所なく療しがたし此
理をよく合點すべし
先救人もやく縊人の背後へまはり
縊人の垂る兩の手臂をうしろより腕と抱絶く
縊人の身少し高くなる心持に抱き別の人何
なくも在合の物 箸の類又ハ舂様の物杯をよしなく縊人の足の
下へ入踏留になる様に置く抱る人も俱に其

臺に人の登りゐる處し如斯して後縊人の足
の踏留の様子を看定るうへにて別人縄を截断
よくきれる利處し扨此縄を截るとき抱たる
刀かなく切べし
人縊人の臍の次に両手を當てしかと抱住い
て縄を截断と一時に嘔と聲をかけながら腹を引
しめ上の方へ抱する手にて按摩べし縄を截と腹を按あ
ぐると一拍子にすべし二段になりては此時縊人初
あし按摩る様は下の圖を考ふ處し
て息吹くへそとのかり此拍子をひきぬ様にし

するこそ専要なり扨息吹くしても抱する手を留る
めはやまり腹を抱住ながら縊人と倶に抱人も
そつと下に坐はるべし縊人は両足を踏伸させておき
此時別人手を添て倒れぬ様に扶抱く代り合
初抱する人左の手にて縊人の襟をとらへ右の手
にて縊人の身柱次より七椎の次まで撫おろ
すこと六七遍して後項後を按捺こと二三遍して次
に瘂門の両傍の太筋と頭の枕骨との着ぎは

處を法のごとく捉定めること暫して後背の六七椎の
次を手掌にてしたゝかに打べし〔打法ハ打あがるやうに手を下より上の方へ打あぐるやうにすべし〕
し此意味なく此時初て正氣になる者あり〔打留てハあしゝ〕右
の救法五ッの次第あり左に圖なして考べし○
正氣付たる時肉桂〔薬店にあり東京を用ゆべし〕を濃煎含與へ
消息ひく粥清を與飲しめ喉腸を濡てをし

縊人を救法圖

○一 縄を截人とせハ先ッ下の縊人の足れ下く臺をすへるなれバ抱きたる人と心を合せ一拍子に截べし○縄を截て後ハ其まゝ抱なすへる縊人と共にしるべし其次ハ左の圖を

大抵縊死したる人足跗垂下らざるものハ救法を用て活るものなり垂さがりたるものハ活がたし

肛門より糞もれたる者亦活がたし

㊁ 下にまはりたる時別の人手を添へ扶て足を伸坐せしめて此法を施すべし

右の手にて縊人の背を撫おろすべし

ちりけところハ是より此骨より下へなでおろすべし

左の手にて縊人の襟を捉へゆるめてくつろげべし

ちりけ骨と八此所のへんまで上よりなでおろすを六七度もすべし

縊人足をのぶるを如此

㊂ 縊人の頭項を救人の左の指頭にてくび揉るを圖のごとくするを二三遍すべし
其次に

救人の手法如斯

㊃ 此ぼんのくぼの両傍の点ある所を大指と中指の頭にてきびしく按つけるを暫くして

此ぼんのくぼ両傍の穴を探る

㊄ 此所ハ大体七の椎のへんなり 此ところを此ひら手にて打べし

此時精神きつくなるなり

柱ハやはり提るべし

此ひら手にて声を掛ながら打て下の方へ引べし

下の方へ打さがらに引下べし

又自縊人他の人早く見つけ未氣絶ざれバ已
に昏迷りんとするハ速に扶く葱の心を採其
人の耳孔と鼻孔の中へ深刺こみ血出く甦〇又
方梁上塵を採大豆の大許竹管に入き四人同時
に力を極く両乃耳と両の鼻孔内へ吹こむべし
〇灸法急に人中の穴にあり図説中風に灸すべし且両
足の大指乃内の爪乃甲の角を離る事二分許
の所に灸を 是隠白の穴也 図中風に出も 各二十一壯ばかりして

べし又急に縊人の身を抱定稍高くのぼしむれバ
縊たる所も稍寛めるなり仍て別に一人をして
其縊たる所を漸〻と寛く其呼吸漸往來を
覚べハ乃縄を解下し仍て一人ハ口を以て縊
人の鼻乃孔を吸く呼吸を接續しめく良縊
たる時早く見つけるハ此法を用てよし
凡縊死に遇バ人〻懼怕周章ものなり随分
心神を鎮定く以上の法を行ふべし

溺死

人誤て水中に墮る者あらバ急に竹篙或ハ木版等の物を投こと與べし溺人執る把物あれバ浮故水抔呑ことも少して救易し竹篙木版にかぎらず水によく浮物を投與てよし

凡水に泅心會なき人誤りて溺るゝとき竹木の類の浮物ありて捉ゆるとき力にせんとして是を空に抱付なんどすれバ我身の重みにて其物と共に沈ミ溺るゝ者なり此故に惟かるく按りと手をかけて放れぬ様にやうへいるゝときハ沈む事なし

已溺水せる人を救とせバ急に水中より倒に
提出し牛の背上に横に臥く死人の腹を牛背に
合牛を牽て徐く行めバ腹中の水自吐出す
○又方溺死したるを救に白礬の末を鼻孔中に
吹入熬鹽を臍中に擦猪牙皂莢薬店にあり末にして
綿に裹穀道の中へ納置釜或ハ鍋の類を地上に
覆置其上へ溺人を俯に臥溺人の臍と釜の臍と
ちと相合く脚後を稍高し手を以て溺人の頭を

托バ口中より自ら水出で活すべし若口噤く
開ざるハ筋を横に衝てらし圖と合せ見るべし
○又法溺人を水中より倒に引あげ平地に置き
溺人の背後より抱住前にて藁を焚て火の氣を
腹へあて烟を面にかゝる様にすべし水を吐出す
者あり若水出ざる時ハ抱たる人直に其手にて
嘔と聲掛るがくし溺人の臍の次をうへの方へ
按あげ毎し水出ざるあり此法簡便なり何

火を多く焚く煖薫るをよしとス

○又方一人健なる者を選び溺人を仰のけにして倒に背に肩両の足を肩にかけ十五六間も走バ水自然と口中より出るなり 下に図あり

水を吐盡して老薑を擦く牙歯に塗り白礬を末にし管を以く鼻孔中へ吹入るべきなり

白礬なきときハ醋を多く鼻孔に灌入てよし

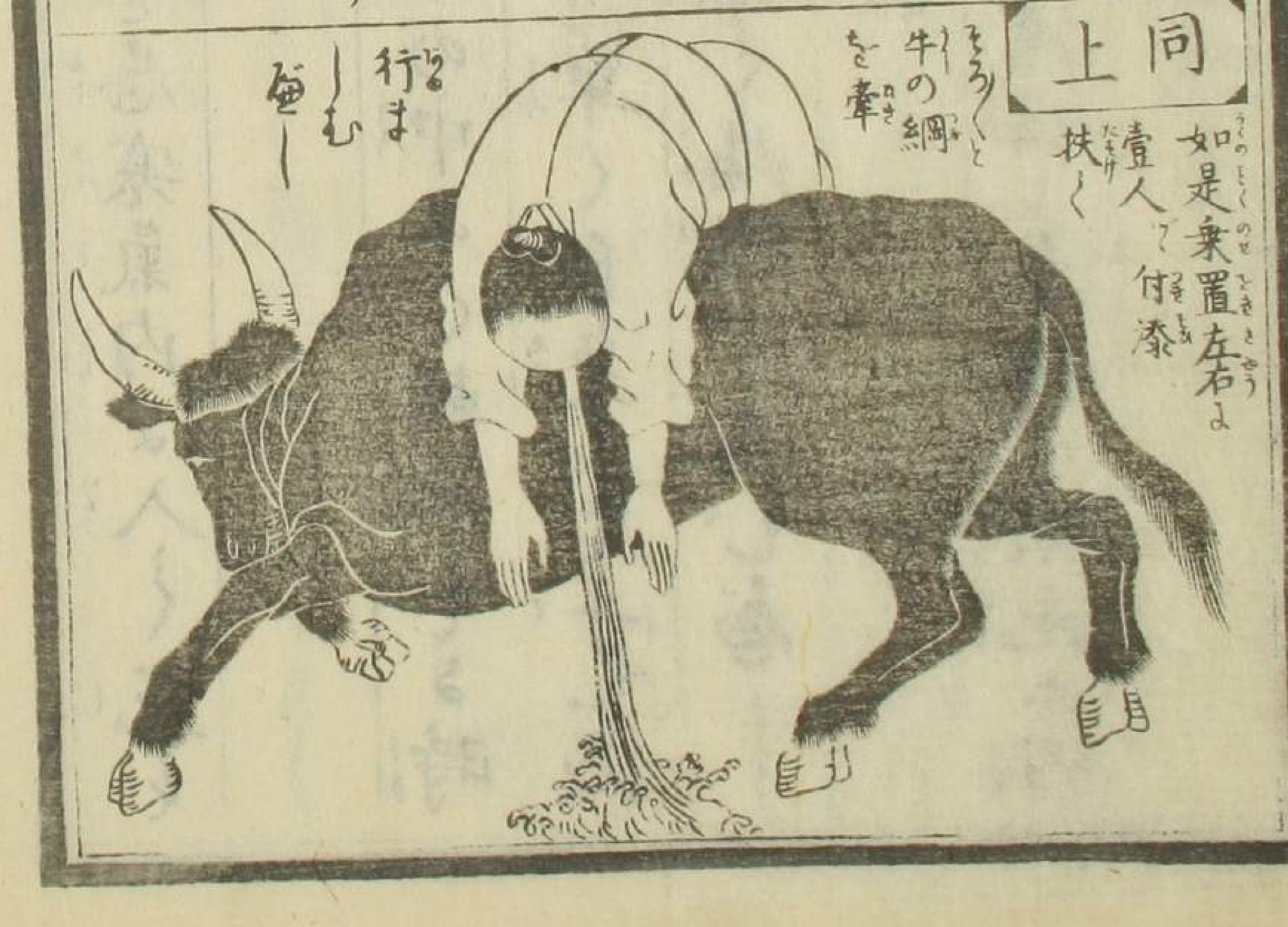
甦て後臍中に二三百壮灸すべし

凡水死の人烈火烘を忌寒氣内に入く死を救べからず

○能泅者と言ども水の中にて轉筋する時ハ多くハ死するものなり早く自身にて手を以く足の大趾を力を極く痛程り屈むべし諸筋舒て死に至らず

以上の諸法を用ひ水を吐る後ハ凍死の所を見合く治法を施すべし

救溺死人圖
脚後ハ藁をしきて稍高くすべし
壹人ハ溺人の頭を兩手にて擧水を吐せしむ


同上
如是乗置左右より壹人ツヽ付添扶く
ゆる〳〵と牛の綱を牽行しむべし

又溺死救法
此手にて此所を按あぐる也やはらかに按べしむりにと按をよしとせず

同上

如是背に負て小足に走ときハ口より自然と水出るなり

凍死 冬月雪中林にこゞえ死せるなり

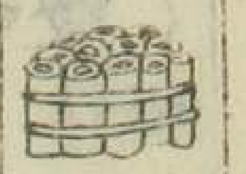
病状 初ハ顔色青惨或ハ目運し後にハ惣身こゞえ手足ふるへ漸くに冷あがり殭直になり唇も色青黒脈至て沈伏或ハ脉なき如に至り口ももの云ことならず遂に倒れ無性になる也

療法 先扶て煖なる室に入凍人の衣を去せ傍人の着せし熱衣に包み米を炒熱し或ハ竈下の灰を熱く炒袋の内へ入れ病人の胸を慰し

あたゝむべし冷れバ換て幾度もいれべし如く
酒と生姜の絞り汁等なに和白熱く煖して飲
しむ宜し○冷極りて唇青く脈なく陰嚢
縮上りたる者同法にて心頭を先熨法（方ハ上にあり）
をいて温め臍の中氣海關元（二穴中風の條圖説あり）の穴
に十五壮灸をすべし右の法を用て口中氣出て
後ハ稀粥清を稍かと灌のませ又ハ生姜湯を
其間にまじへのましめて漸くに醒宜し

熨法

醶醋に麩皮（麥のかわなり）を拌て炒布袋に納め
入て心頭臍の邊を熨べし○又法大葱白一把
線にて紮上と下を切りてかくし



如是

なるし次麝香二分五厘硫黄二分五厘（二品共に薬店にあり）
此二色を臍の肉へ納置き其上へ右の札
をまる葱白を安其上を熨斗様の物へ火を盛て
熨のべし葱たゞるときは換へなをすべし病人
手足温に汗發て愈るなり若火もなき處ならバ

バ凍人ハ毛氈或ハ藁薦杯に裹て索もて繫
定平穏なる處に放傍人兩人つゝ相對て裹
置たる凍人を數次も輕く往來へ滚轉べし
四肢自温和になり活べし ○水の中へ落て
凍たるハ先濕たる衣を脱かへさせ水を吐せ
て急に右の法を便に任て用べし 遽て火にて烘又ハ
熱湯にて一概に温むべからず若 一度にあたゝむれバ一命たすからずして死す ○又凍死
まするに藁の籊を採て夥く積其人を裸體

にかし其内へ安臥せしめ其上にも藁の籊を
多くかけ覆て面ばかり出しをき暫して漸
に温になりて蘇生べし其後ハ温なる稀粥など
を飲しむべし ○又寒氣に中りたるに
湯にて芥子を粉り臍の内に塡衣類をかけ
置手帨を熱湯に浸絞りて其芥の上をさへ〳〵
押温べし 冷バ取かへて温てよし ○又方
黒豆一合炒焦熱を早く篩様の物へ入其上より

酒三合許沃かけ其滴し酒を飲てよし

雪中遠路を歩行する人ハ藁の襷を多く槌て軟かにして陰嚢を厚く包其上に褌をよくしめ尚又窮袴等を着すべし凍死を免る毎し○山中抔雪吹に遭て死するを有りこれを防にハ藁を以て鼻孔口とへ厚く當て其上へ覆面頭巾を着すべし雪吹にて吸呼に障なきやうにへ究するに至らバ凡雪吹に遭て死するハ雪風鼻孔と口とへ吹こみて息をとむる故なれバなり

○熱き粥を多く食し又ハ味噌汁熱して多く飲くによし糍糕又よし酒ハ一旦酔さる内ハよし醒るときハ寒氣一倍にてよく傷るものなり○雪中ならバとるも冱寒の節遠く歩て寒氣襲さるを覺へバ頻く陰嚢を温べし焚火をよし

雷震死 いかづちにうたれ死するなり

雷に撃るゝ事軽きものハ氣絶しけれども理療を加へて蘇ることあり

療法 其人を仰に臥し胸腹の上へ活鮒をおき其鮒動揺バ忽に蘇るなり服藥ハ附子（薬店にあり）一味水にて煎じ用ゆべし（雷近隣近地に震ひ響きに驚き昏倒せるハ中巻驚怖卒死乃條の理療を用べし）○雷火のために皮肉を傷られ焦爛腫痛にハ降真香（薬店にあり香によき木なり）燒

焼その煙にて薫ずれバ虫ハ汁出て愈ゆるなり

○又方玉蜀黍（又唐もろこしともいふ）穂苞茎葉ともに煮て汁を取り焦處并頻ゝ薫洗てよし

諸物入九竅

九竅ハ目二ツ耳二ツ鼻二ツ口一ツ両陰を雜て九竅と云

諸物入目

目の内へ諸物の入るハ砂塵とも手にていらふ事なかれ摩なとすれバ大に害あり

稲或ハ麦の芒目の内に入るハ大麦を煮て汁を取除こと洗ふべし（洗法ハ後に出せり見合すべし）○沙塵の目に入るハ面を温水の内に浸置眼を開面を数ゝ振べし沙塵自ら出る○又方大藕根搗爛絹につゝみ眼の内に絞く汁を滴入べし○偶

颶風のされ野蠶蜘蛛乃絲入目て瞇澀痛て開
かねバ兩乃鼻より清湯を流さハ上好金墨を濃
研く新き筆よ點く目の中へ塗て目を閉て
少時ありて手指以て目を開かしむべく蒼ご
かされハ其絲一ケ所へ聚く白眼の上よ在るべし
新き筆ふく内背の方へ輕く揩よせく置無名
指の頭ふて鼻の方へ拭出さそされハ愈若いそ
おるされハ再塗べし少塵草木石目中ふ入

きるハ人乃乳汁を多く注入くよし○又方書
物等も間よ生ずる所の白魚 圖説下よあり を研ほぶし
乳汁よ和て目中よ注入るべし最良○凡沙塵
等の眼中に入るハ柔なる紙を引裂く燃子
ひねし其人を仰臥しめ輕くと外背より拭
よせく無名指ふく内背の方ふて鼻の方へ
拂出すべし○烟渣目よ入るハ湯などふ洗
ともも愈痛まバとのおり新筆或ハ亂髮ふく

緩々と拂出すべし○石屑眼中へ入たるハ髮の毛を一二本抜取小く輪にして目の内を拂ひ去べし○又方沙塵眼に入たるを覺バ急ぎ上瞼を撮あげく頻に放しすこし撮てあげて放つこと數度をすれバ沙塵一ッ處へあつまるときあれバ其時内背にて名指をいく鼻の方へ拭てとるべし○又方塵埃右の眼へ入りたるハ其人を左を下にし左の眼より入たるハ、

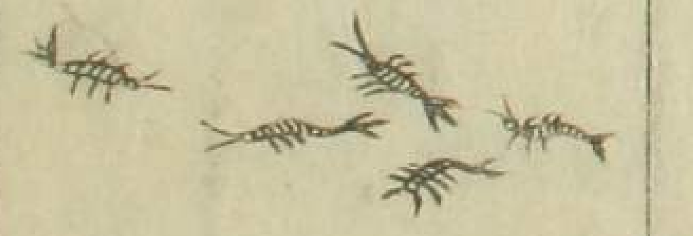
右を下にして側臥さしめて塵の入たる目の上胞を撮あげ置て外背の方より新しき筆ちんちう筆を用べし水をふくませ水を滴らすべし斷間なく數度流しかくれバ沙塵皆内背へあつまれバ此時に藥指の頭にて鼻の方へ拭去

内背外背圖

白魚

和名しミ 江戸俗間にきらむしと云

衣類書紙の間に生る虫なり形ハ小き魚に似たり尾に二岐有り色白く銀の粉を塗たるごとし夏秋の間多し

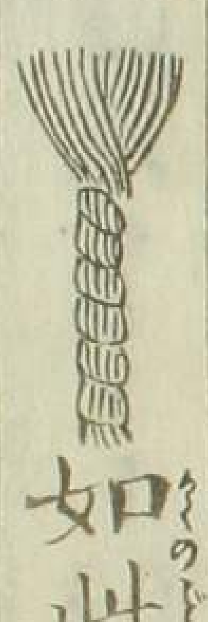


諸物入耳中　諸物鼻に入るを附たり

百蟲耳に入るハ蜀椒を末となし酢に和し耳中へ灌入べし蟲自ら出る○又方葱乃涕を耳中に灌入て蟲自ら出ル○又方鶏冠血を取耳中に滴入て蟲出ず○又方好酒を耳中り滴入るも亦よし○又方猫尿無きときハ生姜を切て切口にて猫乃鼻を擦バ作尿する耳此中へ滴入るときバ蟲出なり
○蚰蜒蜈蚣耳に入るハ胡麻を熬て葛嚢乃

中に貯へ枕とすれハ虫其香を聞て自ら出○又方諸鳥獣の肉を炙て耳を掩へ虫自出○蟻耳中に入るハ一切香物沙糖乃類耳孔の邊におくべし自ら出る○百節蚰蜒并蟻耳孔中に入るハ酢を灌入べし諸虫皆此方を用てよし○又方小蒜図説下を洗浄し擣て絞汁を取耳の中に灌て虫自出○又方蚯蚓を取葱の葉の中へ納て置バ化て水となる此水

を耳中に滴入れバ虫亦水と化○又方黄蠟を軟にして筋のごとく細長して耳の中へ挿こみ徐に牽出せバ虫其端に著て出る鬢つけ油を筋のごとくに揃込もよし○又方麻縄の端を撚て散



如此にし膠を濃焼て其端に傳て徐に耳中に入るれバ蟲粘着て出る此方虫のみならず諸物耳中に入るに皆用ゆべし○又方假令蟲左の耳へ入る時ハ片手

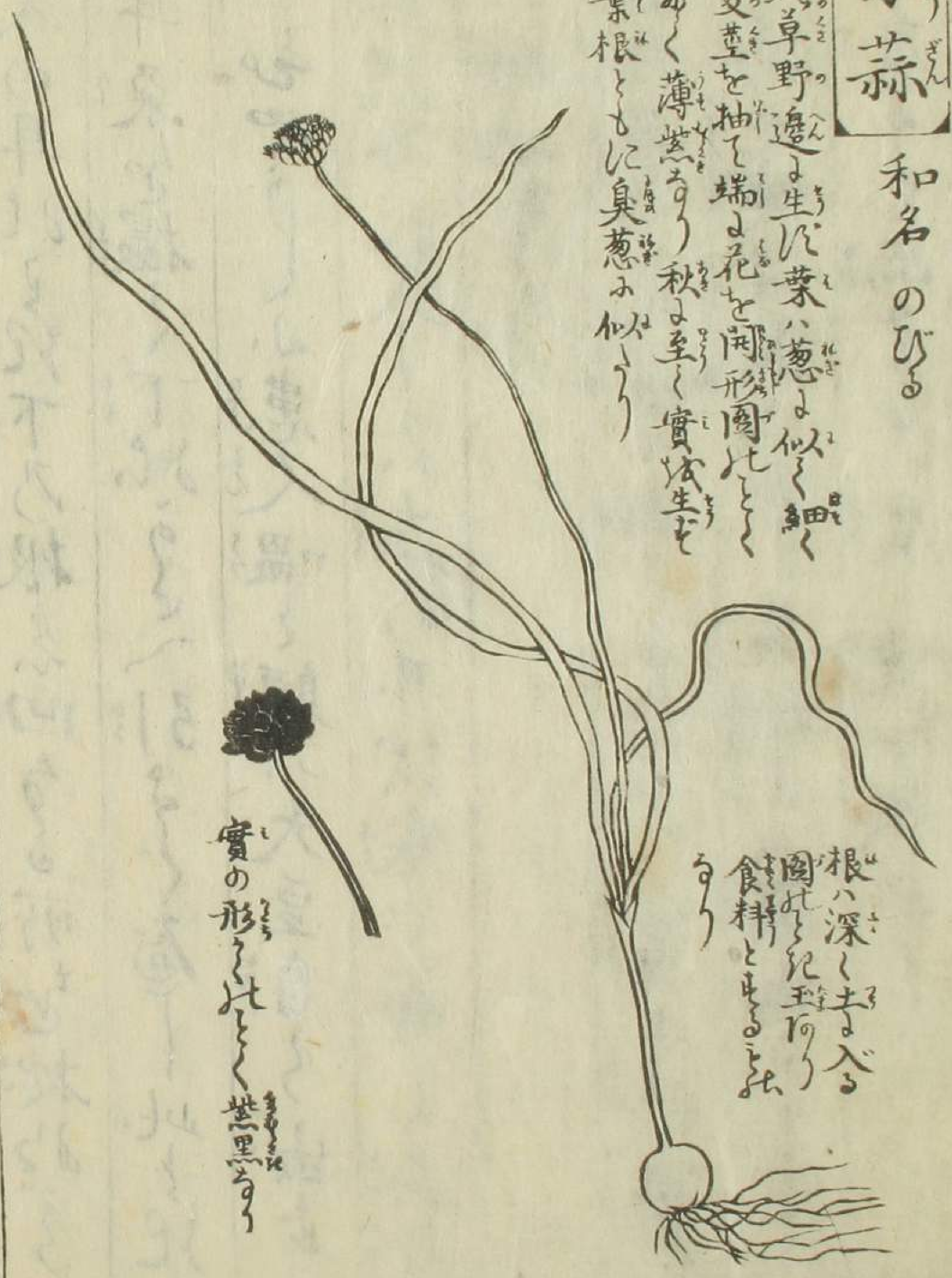
よく右の耳を緊しく閉片手にてハ両の鼻
の孔を撮く緊く塞ぎ扨口を閉く嘔と躽べし
左耳の虫自出右の耳へ入たるハ左の耳を塞
て躽を前法のごとし○又方夜中なれバ紙
撚に火を點し耳の邊にはしまれべし明を
見せバ虫出るとなり○耳中へ大豆の類入
しハ若し左の耳に入たらバ右の耳と両の
鼻孔を自身よく塞き別の人中指にて患
人の耳のうら下の根の凹なる所を按ながら
耳朶を撮く下のかたへ引さぐべし此とき
一ぢやうしに患人嘔と躽バ大豆自ら出む
右の耳に入しハ左の耳を塞ぐべし其外
ハ同法なり

諸物鼻孔に入て出ざるハ一方の鼻の孔へ紙撚
を挿込嚏を取べし其拍子に飛出るとなり
一度よく出ざるハ度ゝ嚏を取べし

小蒜

和名　のびる

此草野邊ニ生ス葉ハ葱ニ似て細く夏茎を抽て端ニ花を開形圓にして細く薄紫なり秋ニ至て實熟生ぞ葉根ともに臭葱ニ似たり



誤呑銅鐵物

誤呑錢并銅鐵物

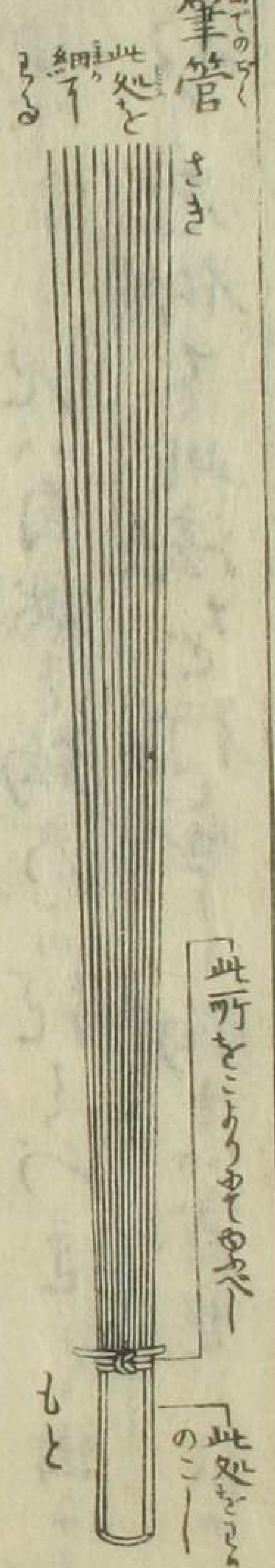
たるハ艾蒿一把水五合入半ふ煎じ頓ふ服すべし○又方韮の葉或羹となし多く喫べし韮葉銅物を纏繞く肛門より下るなり○又方葧臍ふよあり（圖說下）蠶豆（四五月の頃実る食料ぬ品なり）と同く煮食よし又生ふく擦多食べし香油ふ調服最よとし○又方堅炭を末となし飯乃取湯ふく服すれバ大便より下○又方胡桃の末

実なり食料とも多食すべし○又方飴糖を多すれバよのなり食すべし○又方冬葵図説下乃絞汁も其侭多飲てよし

誤呑金銀たるハ硫黄（發燭に付るものなり茶店にありうけ目たゝ乃目とい）物上品なり（用也べし）石灰二味各黒豆粒ほどよくよく末ニして酒に調へ服すべし○又方艾も水にて煎じ飲べし○又方金銀銅鐵等化さゞるときハ縮砂（少茶店にあり）せんじおほく服して自下る

誤呑釣（魚をつる もりなり）を呑るハ糸に付たる鈎を呑たらバ必其糸を引べからず急に水晶の珠子乃珠又ハ粳糯（小児の弄単實也）を幾つもくも咽より出たる所の糸にとをし漸々に咽の奥の方へ其珠を墜下すと鈎ハ自然と鈎乃この鈎をつきて出る者あり尤仰で此法を行べし鈎ある方重くなるゆへ自ら抜出るなり此理を考べし○又方先筆管を二つに割一つハ捨て不用一つを細に割りて

一端の方ハのこし置き此残し置し所を
紙撚にて結圖のごとくし



右のごとく割たる所を喉へ入鉤を割たる筆管
の簳の間へ挿込ミ細き筋を用て紙撚の結たる
所向ふの方喉の方へ突き送れバ簳の開きし所
にある鉤をしかと留て動かし此を引手前の方
へ引く取出し取ときハ少しひねりて取べし鉤の
鬚をつけし筆管の簳の間へはさまりて出るもの也

誤呑鍼

誤呑鍼ハ磁石（薬店にあり）を吸石なり針を棗の核許
○（此大さなり）なる物一塊齒の前に附息を呵出し
（寒氣のせつ凍たる手に息を吹かくるごとくするなり）を數度すれバ鍼
自出○又方癩蝦蟆圖說にあり數個を捕へ頭を剥
て倒にし血垂出たるを盌様の物に接一杯許取
く喉中に灌入て時を移せバ鍼自轉になりて

吐出〇又方飴糖を多く食して即出〇又方紫糖を丸く呑べし〇又方蠶豆を煮韮と同く食へバ大便より出

誤呑頭髪 咽に繞ひ出ざるハ乱髪焼灰となし水に調へ服すべし

坏墣の物を誤く呑 て咽に梗ハ欵冬（茎葉并に花共に食料也）乃根を焼て灰となし舌の上に点べし

誤て硝子の碎を呑 するハ欵冬を黒焼きを白湯にて服すべし〇又方赤土（山の崖など艸木の生ぜざる所の肥たる土なり）水に攪て多く飲くよし

冬葵 和名 ふゆあふひ かんあふひ

此草冬を経て凋ず其状を図せし高二三尺に至るものハ脚葉のこ地に付て茎を出さず花葉の間より叢開く色白し

荸薺　和名　くろぐわゐ

此物浅き水の中に生ず三四月のころ葉を生じ枝なく燈心艸のごとし秋の後に至りて泥の中にあり根を生ず形圓にしてくそ鬚根あり丸き玉色黒く内白し食料とすべし

癩蝦蟆　和名　ひきがへる

濕地に生じ卵ハ水中に産む眉の邊に嚢の如くなるもの二ツあり通身顆粒あつて行こと極て遅し跳躍をなさず亦鳴こと稀也背茶褐色或ハ黒色或帯とあり腹ハ白して黒き斑紋あり夏秋乃頃薄暮又ハ夕立のあと折々人家園庭に出て小虫を食ものを見なり

諸物哽咽

諸魚骨哽咽　あるハ飴糖を鶏子黄許の大さ通口に呑にすべし若出ざるハ再三呑べし後ほど大にして呑ごとし○又方款冬花（食料になる物なり）の末を吹入れ又其まゝ煎じて用也花なき時ハ根を濃くせんじて用也○又方好蜜を含稍ゝと咽に入べし○又方象牙を削水にて服すべし○又方鯉乃鱗或ハ芭蕉の巻葉何にても

焼く末とかし水にて服し出ざるときハ再三
服すべし○又方細銅線を火ニて焼軟にして其
頭へ黄蠟〔薬店ニあり〕を無穂子ほど大さ程附て綿にて
裹纏ふくよくよく結付咽内へ徐々と推入置し
哽する骨自然と下るなり若下ざるときハ再び
推入べし○又方新綿ニ白糖を裹梅の大さほ
どにして其人ニ呑せ喉に入る時に其綿乃端
をとらへくと牽バ骨綿に粘く出るなり○又方

白梅核を去肉バおしつぶし大指の頂ほどに
丸め綿ニつゝミ線を結付冷煎茶にて呑下す
べし線の頭ハ手ニ持ち梅肉を嘔出さすべし骨
附出るなり

魚骨入腹刺痛 ハ呉茱萸〔薬店〕にり煎服すれバ其骨輭
ニなりて出若出ざれバ再三服すて○又方縮砂
〔薬店ニあり〕沙糖等分煎し服すて鳥骨咽ニ哽にも宜

鶏骨哽咽 五棓子〔薬店ニあり〕歯ぐろふし〔婦人の用る〕末とし

服すれバ此物咽に入やいなや化して下る

鯗魚咽に梗ハ直に鯗魚を漫火にて炙薫して食すれバ即吐出べし

竹木刺咽に刺たるハ榎の實 圖説下にあり 二三粒を呑べし ○又方陳皮 藥店にあり を一文煎じ服してよし ○又方貫衆 藥店にあり 濃煎服すべし

稲の芒喉を呑たるハ白餳を頻に食してよし

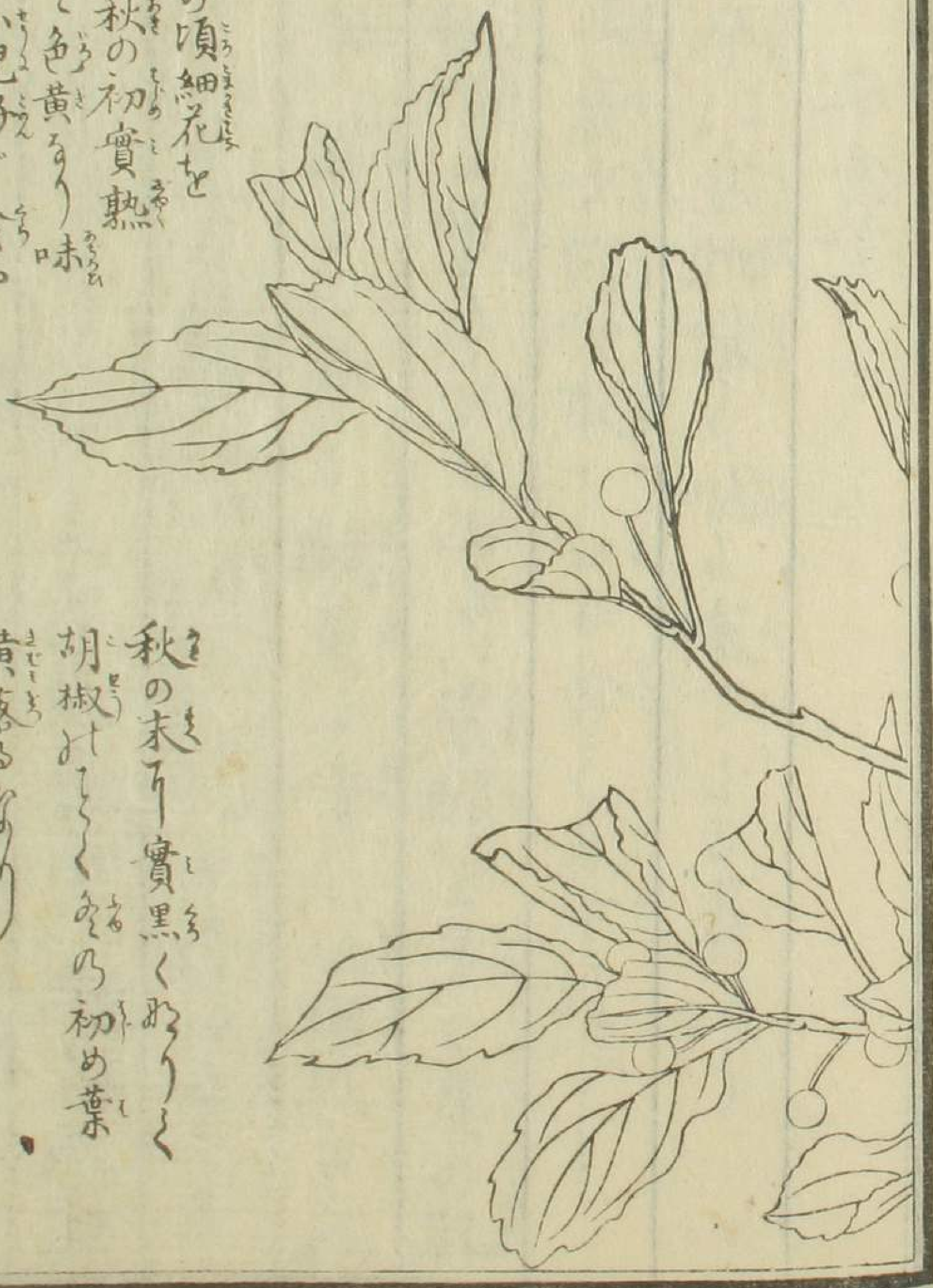
稲芒粘咽て出ざるハ箭頭草 圖説にあり を嚼て嚥下るべし

箭頭草 和名すみれ

此草野邊に生ず春の初苗を生じ二三月頃花を開く色紫にして形圖のごとし花の色白きものハ用ゆべからず又花も同じくよく藥能きものあり又朝鮮すみれとて葉に刻缺あるものあり皆用ゆべからず

榎の木

此樹大木に至る二月の頃芽抜出し葉の形圖のごとし



三月の頃細花を開き秋の初實熟して色黄なり味甘し小兒好ぐ食ふ

秋の末に實黒くなりて胡椒のごとく冬の初め葉黄落るなり

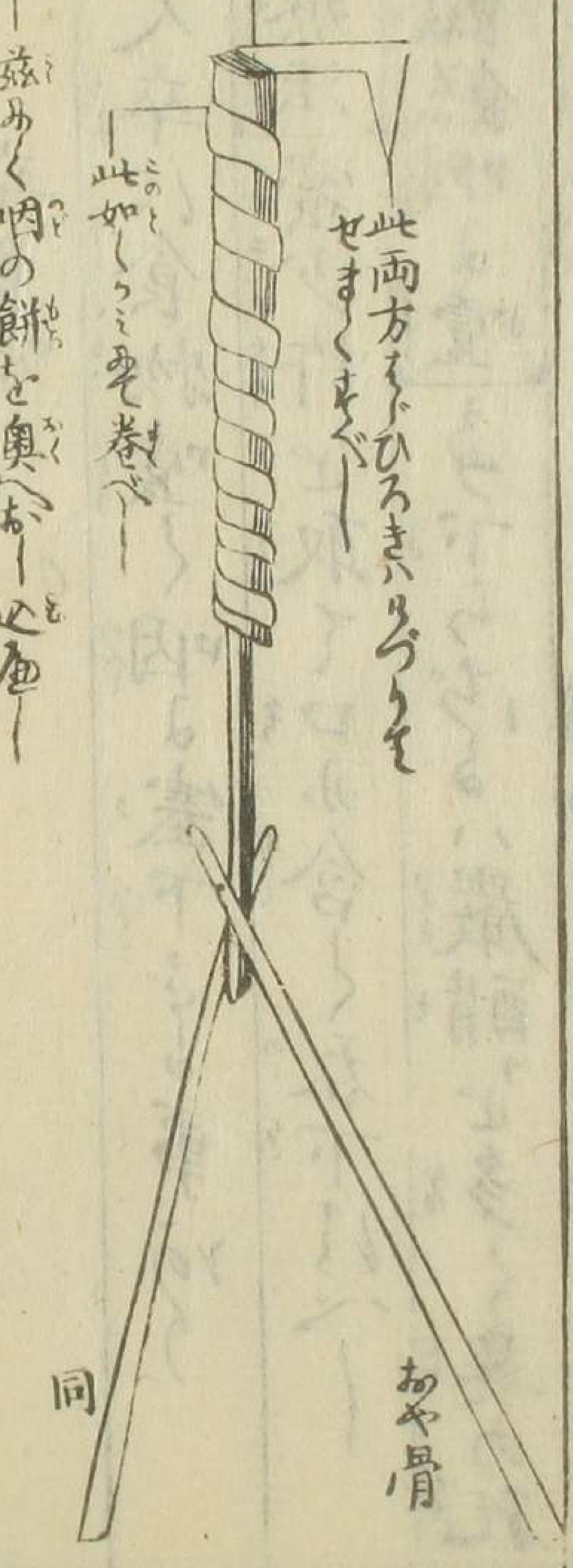
卒食噎

人卒に食物噎く咽に塞下ざる事あり

療法 蜜少許ほどを取て口に含く呑下すべし

餈餻咽に噎て下らざるハ嚴醋ほど多く鼻の孔の内へ灌こむべし 酸気に噎く吐出して然なり○又方 鉄漿 女の歯につける おはぐろなり 少許口中へそゝぎ入きてよし○又方 先扇子の両方のおやぼねを取り捨 幅ひろきハ両側を削せま

そして上を紙にてゆるく巻此端を咽へ入れ餅が奥の方へ突込てよし又牛房の根が一尺許り切て咽に入れ餅が奥の方へ突込むよし



蛇入人耳口鼻肛門并婦人陰門

凡蛇の竅に入るを挽出んとて挽ときハ蛇深く入る又ハ中より断きるゝものなり挽べからず

蛇の竅に入るハ尾を捉く蛇にそへる竹木にくゝりて逆にすゑつけバ自ら出る者なり竹木にても無き所ならバ捐にて撫廻し楊枝杯にてかくなづるよし○又方蛇の尾を執て小刀にて其尾を縦に割傷烟草脂多く蛇尾の傷

口へ納其うへを紙みくも布みてもと裹て札置と記ハ蛇自出づ或ハ山椒又ハ胡椒嚼くごきて納もるし○又方蛇尾を握定く其尾り艾よて灸もべし○若辛物も火とぬきとおハ蛇の尾を捉定く小刀をんく尾端の處ぬ周匝ぐ小刀め疵入て皮ぬ倒よ剝脱と記ハ蛇自出

○蛇出て後雄黄末を人參ぬ煎汁みく服べし

又雄黄の末酒みく服そるもよし（鷄冠雄黄と云 よし差本にあり）

諸物入肉（とげをとなるなり）

物縫鍼よかぎらぬ鍼を刺てぬけざるハ括樓（圖説下よあり）の根を搗く泥のごくし其上よ傅西し一日よ三次ごのりを更易べし○又方杏仁（菜店よあり）搗爛し車の脂み調く其上り貼べし○又方蓖麻子（圖説前の急喉痺乃條よあり）壹箇研つぶし先帛をいて傷處み襯て其上へ傅頻看く若刺鍼の頭少しも出バ即み拔とる

傅し或ハ白梅乃肉も入同く研く貼も最よし抜去る事遅きときハ好肉を吸出すてよし○又方菅笠ニ用る菅ニて針の入たる前後を一寸許離して其の又管も黒焼ニして水ニとき針入多る傷口ニ附べし必ず出る者なり○又方蟷螂（下ニ図説あり）の頭を研く糊ニおしまぜ紙を銭の大許ニ剪く件ノ糊を攤く傷處ニ貼傅し○又方烏翎十五枚火ニて炙焦末と

なし醋ニて調針の入たる所へぬり其上を紙ニて蓋傅し一両度ニて針自ら出○鍼乃腹に入たるハ櫟炭（くぬ木のこと むさしなり）末ニして一二匁汲たて水ニて服すべし○又方鼠糞を糊ニ和く貼てよし○又縮砂（薬店ニあり）水ニ煎服

竹又ハ木の刺たちたるハ鹿の瞳子を取て乾し末となし糊ニおしまぜ銭大ほどに剪たる紙ニ攤く傷處ニ貼傅し其刺自ら出最妙

なり○又方鹿角を焼末となし水に和て其
上に塗べし○又方生地黄〈薬店にあり〉嚼爛して傳て
罨べし○又方豉〈納豆なり塩の入ざるを用ゆ〉嚼て傳て
よし○又方甘草を嚼て津に和て傳て妙なり
○又方頭の垢を取て塗べし即出○刺肉の
中に在ば温なる小便の内へ漬すべし良暫し
て出○鍼にて撥ても盡ざるは人の歯垢を取
て封ずべし即爛なり○又方螻蛄〈図説下にあり〉搗て

塗べし○又方蝓〈稲薬は生ある蟲なり図にあり〉其沫をしぼり
米糊におしまぜ刺のうへに貼るべし黒焼にして
たるもよし

水中にて貝の砕けたる足の肉中に入り痛強く
出ざるは雨蛤〈図にあり〉活たるを擘き傷處に傳
置てよし

海鶏魚尾に刺

なり此刺甚あるべし若人誤
觸て肉を傷ば大に腫痛忍べからず甚は死に

至る恐べし若此毒を被バ樟脳薬店ニあり又ハ
樟木の枝葉図説下ニあり共ニ焚薫てよし○又方きすご魚なり又きすといふ図説の肉など擦塗て妙なり
中巻小便急閉ニ出ル
硝子の砕肉ニ入たるハ赤土山の崖など草木の生ぜざる所より肥たる土なり水ニ調て数〻塗べし

括楼

蔓草なり葉ハ瓜ニ似て岐多し毛ありて色緑なり光澤あり實ハ小き瓜の如し文長もあり色黄ニ熟して瓤も黄ニして青し仁是

瓜蔞仁と云根ハ甚大なること拳あり皮の色黄ニして中白し

此草ニ似たる者一種あり和ニ玉章といひ漢ニて王瓜といふ又牛ごろしといふあり能く誤り易し然れども葉皆澀りて光澤なし実も異なり辨ずべし

螻蛄

和名 けら すむし

此虫ハ土中に居て土を掘走ること捷し状圖乃ごとくにして茶褐いろなり秋翅長て飛夜燈火ゑ近くものあり大いさ大抵圖のごとし

螳螂

和名 かまきり

此虫ハ圖の大の如く色ハ淡緑色首を驤げ臂を修め腹大なり手二ツ状鎌のごとし足四ツあり草木の枝葉乃間をゆくこと甚捷し

螽

和名 いなむし 又 いなご

此虫状圖のごとく翅足ともに青し夏秋の間多く稲葉ゑ集居るものあり大いさ大抵圖のごとし

雨蛤

和名 あまがへる

此虫状圖のごとく背の色青く腹白し草木の枝ゑ居て雨降ん時ハ聲高くして鳴もの是なり又背色も白きものあり

樟

和名 くす くすのき

俗に楠の字を用ることあり
此木葉の形圖のごとく大木多きことなり葉枝ともに香あり
木を斫くるに心の黒赤もの是なり
もし香氣薄く木心黒赤なるものハ犬くすと言もあり
薬に用べからず
此木を煎じて樟脳を作るゆゑ甚だ樟脳の香りありて

中毒之類

よろづのどくにあたり なるたぐひのせうあり

中諸藥毒

中諸藥毒 煩悶く死せんとするハ急に藍(図説後にあり)の葉をを擣く絞り汁をを多く服まで數椀ニ至ればよしとれ生藍草なきときハ青布青絹をを水に洗ひ汁をを取服すべし画家に用る青黛(藥店にあり画具肆にもあり粉にせざるをよしとす 玉あいろう棒あいろう何も用てよし)染家の藍皆用てよし ○又方鷄子の黄をを取て多く飲べし

瘥ざれバ再三に至るべし○又方人小便を新
あしく人の糞に和匂絞く汁を取服すも多服
するも妙よし上に○又方甘草壹匁黒豆貳匁
煎じ服も一切の藥毒に妙なり○又方生葛圖説
吐血の條にあり
を掘採擣碎て絞汁を服も乾するハ
煮汁を取く服も此汁を飲ぐ後大便下利く
止ざるハ龍骨唐より渡るものよし又ハ此方乃讃州小豆島より出るもよし
何も藥店にあり
末となし服も末となしのごく其

儘なるハ煮て汁を飲も亦得○又甘草三匁水
三椀を一碗半に煎く滓を去て後藜豆粉を入
再煎じ數沸く蜜半兩入て服すも○諸解毒藥
を服するにハ猫の涎を用く飲下にし猫の涎を
取にハ辛辣菜胡椒番椒の類を其鼻に塗くし即涎出ぞ

附子烏頭の毒に中
しるハ始の諸藥毒を解する
藥何もよし若吐く止ざるハ香油少許を灌飲
しめくよし○又方多年陳壁土水に調て服も

〇又方多く飴糖を食てよし

阿片の毒に中

たるハ始めハ酒に酔たる心地なて後にハ氣をうしなひ昏憒するものなり醲醋を温め熱して砂糖を入一二碗を飲しめ鳥羽にて咽を探吐却せしむれバ醒りなるものなり

巴豆の毒に中

て大便下利して止ざるハ冷水或飲でよし冷飯冷粥新汲水に清喫亦得〇又赤豆煮汁藿の煮汁黒豆の煮汁皆よく其毒を解多服をよしとす又方黄連と黄柏二味薬店にあり或等分にして煎じ冷く服す熱湯熱飯一切の熱物を服食すべからず

苦匏の毒に中

たるハ吐利して止ず頓黍穰を焼灰となし水に浸して汁を取く多飲すべし

斑蝥并に元青の毒に中

斑蝥ハ甲ある蟲なり長さ五六分背に黄と黒との畫になりて見事なり觜尖て頭の赤き點あり多く豆の葉に集るものなり芫青ハ斑蝥に似て

青く洸るもの有り　まるハ藜豆又ハ黒豆又ハ糯
二種共ニ大毒あり
米を水ニ和く研汁を取服も○又藍の絞汁
多服てよし

鉛粉の毒に中

るハ麻油ニ蜂蜜を和飴糖を
加く服も毒即解

砒霜の毒ニ中

此毒ニ中る人ニハ湯茶を與べからず仰臥も面かくも　胸腹
絞痛吐して吐ぜ面青手脚冷厥との也楊梅皮
胸後ニあり薬　多少ニ拘ぜ水煎服べし○又方急
店ニも有り

小人尿或ハ人糞汁を多く服てよし○又方藜
豆粉十匁黄泥十匁鶏子清九箇黒豆の煮汁ニ和
て服もべし○又方膽礬（薬店ニあり金物を腐るものなり）三分
研細し冷水ニて灌飲しむべし○又方鬱金の
末（薬店ニあり）蜜少許を入水に和服も○又方白芷
（薬店に有り）此末を井華水ニ調服し○又方生螺を
取研く冷水ニて服も○又方藍汁多服して
よし○又方香油を其侭飲吐してよし○又方

砒石を服し遍身赤色なりし昏憒なり或ハ吐瀉する者ハ急に醶醋一碗許を飲しむべし

以上の薬みな吐又瀉すれバ毒解するなり

野葛の毒

山野に有り和名つるうるし蔓草なり其藤色赤節高く節の所ごとに葉三つ付て葛の葉に似て厚光あり節の間に花を開く細かして黄なり蔓を切バ汁出て人の身に付バ體のぶき痛痒をおこしく食へバ人を殺す

誤て中るハ急に鶏子三枚黄も白もてゝみ和く呑下べし○又方野葛れ毒に中り口開かざる者ハ一尺圍程の大竹を二尺許に截節を洞て其人の両の脇と膊ゑ上へ右の竹筒の切口をしかと當置上れ方乃切口より冷水を灌ぎて筒の内へ入遍し數度水を易かれバ口自開なり○又方甘草一味水にて濃煎じ多飲て良○又方香油に人糞を和て飲べし○又方葱涕を飲てよし

瓜蔕を服し吐不止

煩悶すれハ麝香 薬店にあり

湯にて服すべし○又方白梅肉を喫て良○

又方患人腰までこのけ桶に冷水を盛其水の中へ脚を三里の次まで浸し居て味噌汁を飲べし

諸薬効なき時ハ此方最よし

藍葉

和名 あゐくさ

三四月苗を生ず葉ハ蓼に似て短く花紅にして赤蓼のごとし茎の高さ二三尺に至る秋実を結ぶ又蓼の如し

此草楊梅葉まる葉ちゞれ葉の三種あり功能ハ同じければ何れを用てもよし

染家に用る藍玉を製る草なり

楊梅

和名 山もゝ

樹数丈に至り枝を多く生じ葉図のごとく冬を経て凋まず

春末に如是の花を発す

葉の状如是きものあり同種なり

五六月の間如是なる実を結ぶ食べし又実の色白きものあり中國の物ハ龍眼肉の大きさなるあり

中諸穀菜毒　蔬菓菌蕈の毒に中るを附ス

大麥麦飯或ハ大麥麪條を喫て毒に中るものハ腹脹煩べし燒酒に生姜の絞汁を和し両三盃飲てよし

小麥の毒に中るハ萊服の絞汁を多飲べし○又方赤豆の煮汁を多飲てよし○又方粟米隨意に喫くよし（温飩索麪總て小麥にて製するものを食傷したるハ皆此方に宜し）○山椒杏仁（又薬店にあり）皆麪毒を解

糯もち乾ある侭にて多食し腹内にて心腹脹
絶入んとするハ醤油或其侭飲てよし

饂飩多食しても中焦停滞しハ生の萊菔汁
多く飲てよし凡飲食過多肚腹飽満するに
皆生萊菔の絞汁おほく飲てよし

蕎麥の毒に中するハ楊梅皮（圖說前にいつり或菜店にもあるなり）
末とぬし白湯にて服すべし○又方蘿蔔の
絞汁多く服てよし○又方過食して腹飽
満するには杏仁を咬ば即消なり○又方隨軍
茶（秋花さく荻なり）莖葉ともに剉水にて煎じ用ゆ
宜し○又方九年母（蜜柑の類の菓とみるなり）皮を搗く汁
或絞取り飲てよし乾たる皮（薬店にあり）ハ煎じ
て用ゆ宜し○又方海帶（海より出る品菜とも食するなり）或
煎じ用ゆべし

豆腐或食し毒に中するハ腹脹氣塞て甚し
きハ死せんとはす急に萊服の煎汁或多服そ

但し何藥なくも此煎汁にて用ゆ○又方萊菔おろし汁ハ急に新汲水ニ多く飲てよし○又方杏人を搗て服すべし

諸野菜毒に中るハ葛（図說中巻吐血の條にあり）の根を掘採て切て水の煮汁を多服して良或ハ生なるを擦て絞汁を服ても亦よし○又方香油ハ多飲てよし○又方人乳を飲てよし○又方童子の小便多く飲てよし○又方苦參（薬店にあり）

山野に生ズ（図說）ほり出す酢に煎じ飲バ吐て愈

菘菜を多食毒に中るハ生姜を多喫て良

茶の毒に中るハ砂糖を喫てよし○又方甘草一味煎じ服す○又方白梅を喫てよし

○多茶を飲て腹脹るハ醋少許を飲てよし

煙草の毒に中るハ沙糖を水に調て飲べし

地漿（造法後にみえ）を飲とよし○又方檳榔子（薬店にあり）末にして白湯にて服す○又方味噌汁

を啜亦よし

竹筍の毒に中きバ腹大に緊満て手を近つくべからざれバ急に蕎麦の殻を煮汁を取多く飲べし生姜胡麻亦よく毒を解す

芋の毒に中るハ地漿（造法ハ前に見ゆ）を多服すべし

○又方生姜汁を飲もよし

野芋の毒ホ中（野芋ハ野に自然に生ずる芋なり常に食する芋も畑に作らば捨置事三年なるハ野芋と同く大毒あり食すれバ煩悶し死に至るなり）たるハ土漿

後に説あり 糞汁（人の糞乃汁なり）大豆汁右の内何れも便に任早く飲て毒を解べし

慈姑を食して氣閉するハ生姜其毒を解す

胡椒の毒ホ中するハ藊豆末をぬし服すべし

○嗆て氣絶んとするハ香油を口中へ灌入べし

蕃椒乃毒に中るハ療法胡椒に同（吐血するハ吐血の條に詳なり）

山椒の毒に中咽戟むせ氣閉或ハ白沫を下し身体冷痺絶入んとするハ急に温湯に灰一

撮を入攪飲てよし爐中竈下に在所の灰なり○又方冬葵
の根を掘採洗浄て嚼下て圖説前の銅鐵を誤て呑乃條に出す
良○又方濃磨たる墨汁を多飲てよし
○又方大棗三枚許喫てよし○又方急に新
汲水を多飲てよし○又方甚しきハ人尿を
飲てよし○又方菜油一滴を飲べし

諸海菜昆布海帯紫菜の類を多食すれバ腹
痛發熱白沫を吐悶し急に巖醋を飲てよし

木の實又ハ瓜の類を食て毒に中たるハ肉桂
薬店にありを一味水に濃煎し服すべし○又方
石首魚圖説沖巻小便急閉の條に出すを煮て汁を取多服すと

銀杏を多食すれバ小便閉て身腫香油を多
飲によし○又方地漿造法はにあり○又方藍汁飲
てよし

桃を食し毒に中たるハ桃梟を取焼く末と
為し服すべし桃梟とハ桃子の一ツ二ツ樹に残りて枝に附く黒くなりたる物なり

西瓜を食し毒に中たるハ番椒を剉水に浸濃汁を飲てよし

甜瓜の毒に中るハ麝香（薬店にあり）少許白湯にて服べし○又方塩を白湯に攪服を最よし○又方酒を酔ほど飲べし

菌蕈の類の毒に中るハ地漿を多く飲べしよし（地漿を製する法地上を掘て坑をなし新汲の水を澆て攪水の澄るを候て其水を用）是を地漿と云なり○又方人頭垢を取て水に和て服

きバ必吐却も吐盡バ服度ならバ○又方香油を多飲てよし○又方陳壁土熱湯の内に入澄冷して飲べし○又方甘草（薬店にあり）を麻油に煎じ服すべし○又方茄子能毒を解す何にしてなりとも用ゆべし○又方忍冬生草（図説脚気にあり）なくバ其侭咬ひ乾たるハ煎じ服す度し○又方鯵魚の硬鱗（図説下にあり）を取乾し末となし水にて用ゆ○又方生荷葉搗爛水に和用ゆ

乾くるハ煎じ服を○又方人の屎汁服して一
切毒ある菌に中りたるに妙也○又方吐下し
て止ざるハ茶の芽を末となし新汲水に服
を好挽茶あらバ用べし○又方藥無とき(?)ハ
冷水を多く飲て毒し○又方山梔子圖説血を(?)到(?)
水煎じ服を
笑菌を食したるハ
熱を發し面赤眩暈し口舐
水の如くなる唾出て笑てやまず極きバ悲哭

或ハ血を吐て死を急に地漿造法前に見ゆを多く飲
べし○又方人の糞汁を多飲てよし
松蕈に醉
たるハ豆腐を食をべし凡先豆腐
を食し後に松蕈を食をれバ不醉
凡菌久しき經るもの皆毒あり
若毒に中
たるハ茄子を煮て食し且其汁を飲べし
凡菌の類笠の上に毛ある者笠の裏に襴なき
者笠と莖と脆く落者夜見て光ある者腐爛て
のゝすべて蟲ある者采り歸て色變る者木耳の類赤
しを仰巻て生ずる者菌を煮て姜屑飯粒を投

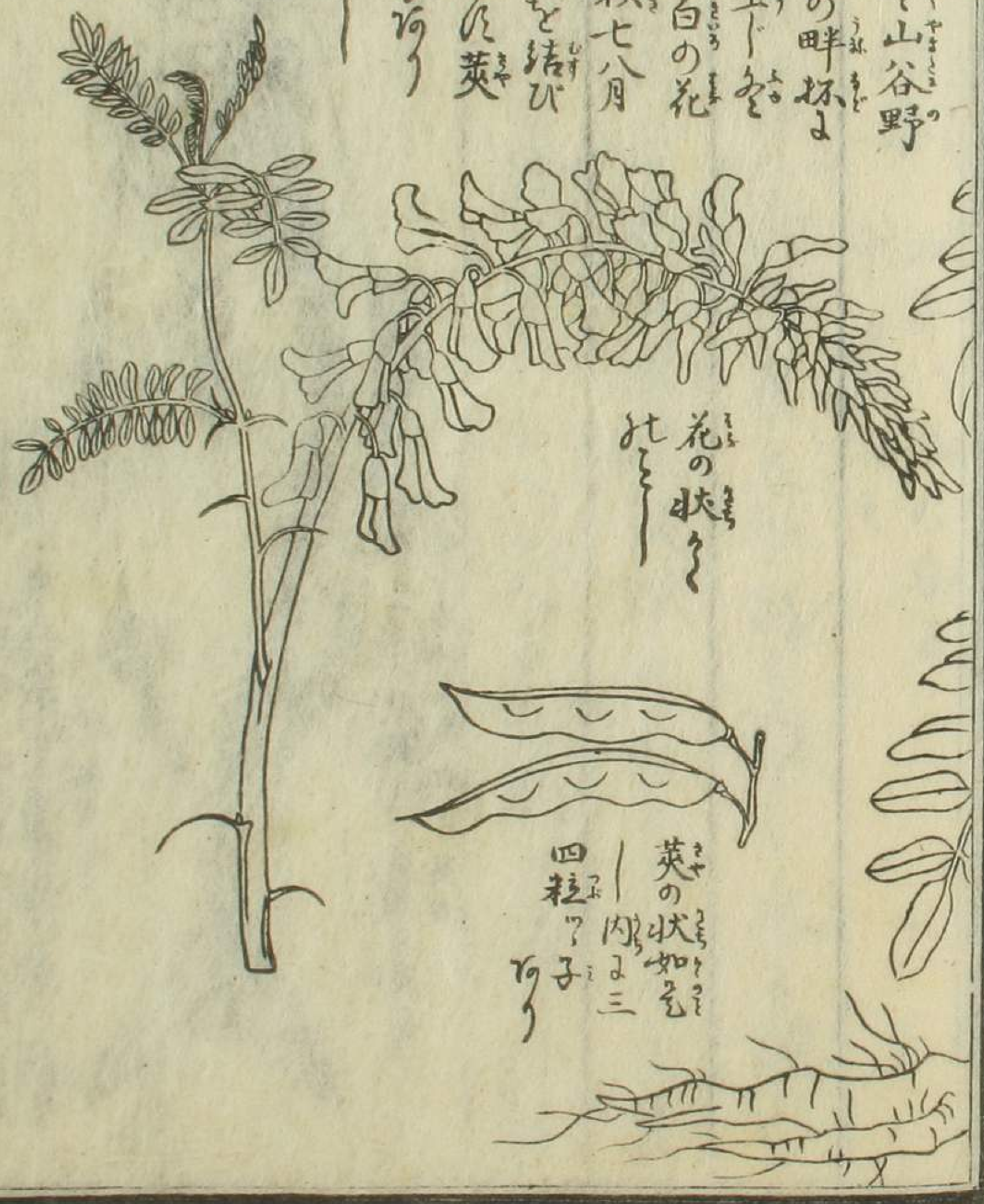
其色黒者煮汁る人影移ぎる者皆毒あり

苦参

和名くらゝ 又まひるぐさ

葉ハ槐の葉ニ似たり圖のごとし 根の状圖のごとく ふしして黄色なり 至て苦し

此草處々山谷野原或ハ田の畔抔ニ生ず春生じ冬凋夏黄白の花を開く秋七八月の比実を結び莢をなす其莢の内ニ子あり小豆のごとし



花の状かくのごとし

莢の状如此 内ニ三四粒の子あり

中酒毒 油并ニ塩の毒に中るを附す

酒の毒に中たるハ菉豆を粉となし水に調て服す○又方赤豆煮汁を飲べし○又方菘菜煮汁を飲てよし○又方生藕を搗て汁を取服す○又方沙糖を温湯に拌て服す○又方九年母皮を煮て汁を取多服てよし○又方葛の花は圖説吐血に出す水に煎じ服す○又方桑椹を喫てよし○又方蔓青菜と米を煮熟し

て滓を去て汁を取冷を待て飲べし○又
方眼子菜圖説下にありを焼く灰となし服すも其
水煎じ服すも亦良なり

酒に酔氣絶するハ小便桶の小便を去く其内
へ徐々と水を入浮くる垢を取急ぎ熱湯を
茶碗に入右の垢を湯の中に入其清くるをハ
湯を口中に灌入きバ鼻の中より氣息出く
醒るなり

焼酒の毒に中 面青口噤昏迷なり甚ハ遍身
色青黒或ハ血を吐或ハ血を下死とするハ冷
水を飲しむきバ立死堅く禁ずべし若此毒
に中るるを覚バ急に衣を脱横臥て志ばら
こ徐と衮轉まはるを數回きれバ悪心あり
吐却して愈○又方其人を裸體なして温湯
の内へ浸漬して煴煖ならしむきバ其毒お
のづから解

焼酒に酔て醒ざるハ菉豆の粉を煖水に攪灌飲しむ宜し即醒◯又方好醋を二三盃飲べし◯又方甜瓜蔓ともに擣く汁を取口中に灌入飲しめて愈◯又方蘿蔔絞汁を多く飲てよし◯又方熱き小便を多飲くよし◯又方胡瓜擣汁を取服蔓も亦用べし◯又方葛の根図説吐血にありを採擣く汁を取口中へ灌入飲しむべし葛粉を煖水にて灌入も飲しむるもよし◯又方甘草薬店にありを末となし煖水に服を◯豆腐を擂面胸腹に塗置バ醒るなり

阿蘭陀酒乃毒に中り死なんとするハ塩を水に煎じ五六椀服てよし

油煠物の毒に中るハ九年母の皮を煎服べし

桐油乃毒に中たるハ吐瀉止まで熱酒を飲宜し

鹽滷の毒に中るハ豆腐を絞て漿を取服べし吐却して愈（豆腐なき時ハ黄豆を水に浸し擣爛汁を取灌下てよし凡熱飲まてべからず）

眼子菜

和名 ひるも

水田中に生ず葉の面て青背紫甚狀竹葉ニ似り六七月蔓延秋の末より冬ハ勿論春迄ハ莖葉なし根を掘取用べし

根の狀如是し

中魚介禽獸肉毒

蟲の毒にあたりたるを附す　諸毒通療する方を附す

諸魚毒に中たるハ鯗魚（烏賊の干たるなり）を水に煎じ服す○又方冬瓜を研く汁を取多く飲べし○又方鮫皮（鮫ハ種類多し物を研るに用る皮を用て良）焼灰となし水に攪服すべし○又方苦參（圖說前にあり）三匁許酢にて煮汁を取服し吐却してよし○又方紫蘇葉（菜店にあり）煎じ服す○又方黑大豆を煮て汁を取多く飲べし○又方酸模（圖下にあり）葉を絞く汁

を取り服す○又方椄骨木(図説中巻擷撰に出)の葉を
搗く汁を絞り取て服す○又方山査子(薬店)に
ある剉水に煎じ服すべし

鱠の毒に中なるハ生姜の絞汁を飲てよし

鱸魚乃毒に中なるハ蘆根(池沼に生ずるものなり)を煎て汁を
取多く服すべし生なるハ搗く汁を取服べし

鮹魚の毒に中あるハ海羅(水にとかし用ゆる海草なり)の糊り湯に
入烊飲べし又能諸魚の毒を解凡

鰹魚乃毒に中なるハ炒たる豆を末となし湯
に攪多く飲てよし○又方唐大黄(薬店にあり)末と
なし五六分白湯にて服すべし○又方壹吾
図説にあり此葉を煎じ汁を取服すべし○又方
櫻の葉又ハ櫻の子煎じ服す又子ハ其侭嚼て良
○又方鐵漿(女子の歯を染るもの也)を飲てよし○又方
橄欖(薬店にあり塩に漬たるハ塩をさし去て用ゆべし)煎じ服す亦良し
一切の魚毒を解す事妙なり○又方椎茸煎

壱石五合ヲ生ニテ手掌ニテ揉汁ヲ飲セテ良 経験シルス

服して妙なり○又方眼子菜（図説前の中酒毒にあり）水に煮て汁を多く飲てよし 此外一切禽獣の毒を解する事妙なり

凡鰹の毒に中るハ冷水を服すべし のこらず

河豚乃毒に中

たるハ急に蒼魚（烏賊の乾たるなり）を剉水多く煎じ服すべし 炙食もよし○又方青砥の磨水を多く飲てよし○又方白礬（茶店にあり）を末となし水に調服すべし○又方人

此糞汁を服すべし○又方無患子（黒く丸き木の実なり 小児弄ぶ物なり）黒焼し水多く服すべし○又方藍蠟（詳に前の菜毒乃注にあり）水に解服すべし○又方茗荷乃根葉をおろし（食ふ茗荷の子出るその根なり）茗荷筍茗を取て汁を絞服すべし○又方沙糖を服すべし○又方古銭（古き錢 りうりう錢なり）一文口中に含み唾を頻飲こむべし

凡河豚の毒に中たるハ辛熱香竄なる丹剤等を服すべからず服すれバ害あり

蟹の毒に中るハ生藕の汁を取服を多飲てよし○又方生冬瓜乃汁多く服てよし○又方蒜を水に煮て汁を取飲てよし○又方黒豆の煮汁多服してよし○又方紫蘇葉煎服し○又方丁子（薬店にあり）一味煎服す

鼈の毒に中たるハ胡椒を喫てよし或ハ煎服を○又方藍汁を數杯飲てよし

指甲螺の毒に中るハ紅花一味煎じ服てよし

諸禽獸の肉の毒に中るハ黒豆を濃煎じ多飲べし○又方蘆根を搗て汁を絞り或ハ煮て汁を取多服す○又方眼子菜（圖説前條に出す）多少にかゝはらず冷水煎服すべし

諸禽獸の臓を食て毒に中るハ人の頭垢を取熱湯に壹匁許を攪服すべし

禽獸自死物ハ皆毒あり人食て毒に中たるハ急に胡葱（葱に似て細き野菜なり）を剉て煮汁を取り

冷を待て多く飲てよし○又方生韭を搗く汁を取服てよし○又方人頭垢前條のごとくして用ゆ○又方白頸蚯蚓八九條擂爛酒和く其汁を多服てよし○又方壁黄土二錢水調服

鷄卵の毒に中るハ醋を飲てよし

鴨の毒に中たるハ糯米の泔を多飲て良○又方温酒を醉ほど飲てよし

雉肉の毒に中るハ犀角（薬店にあり色黒きを最よし）を末にして水に和し一錢を服てよし

狗肉乃毒に中たるハ急に杏人（薬店にあり）一二合皮を去て研つぶし水を入和匀て滓を去て汁を服すべし血片下て愈或ハ山査子（薬店にあり）を加へ煎服もよし或ハ杏仁一味煎服してよし

馬肉の毒　療方犬肉と同じ○又方甘草を濃

煎て多く飲むよし○又方人乳を一盞のみて良

諸の蟲を誤食

するハ山椒を服てよし

蜈蚣誤て食し毒に中

たるハ舌脹て口に出るを

雄雞の冠の血を取舌を浸且咽くよし

蜘蛛を誤て食し暴に死するハ

猫の涎を取く

前の茶毒の條に解毒の薬なの通療の茶を送

取除を出せり いれきもよし

下るべし即吐出なり

小蝦蟆誤食

するれバ小便通ぜず臍下悶痛く

死する者あり生豉豆を蒸腐熟しするなり江戸にいふ寺納豆にハあらず

一合新汲水に投煎濃汁を頻飲てよし

中毒通療

細茶白礬等分末して新汲水に

く服て○又方五倍子薬店にあり好子の鉄漿に入物也の末を好

酒にて服て吐下して良○又方臘月雪水諸

毒を解て貯置べし○又方犀角薬店にあり烏きを良

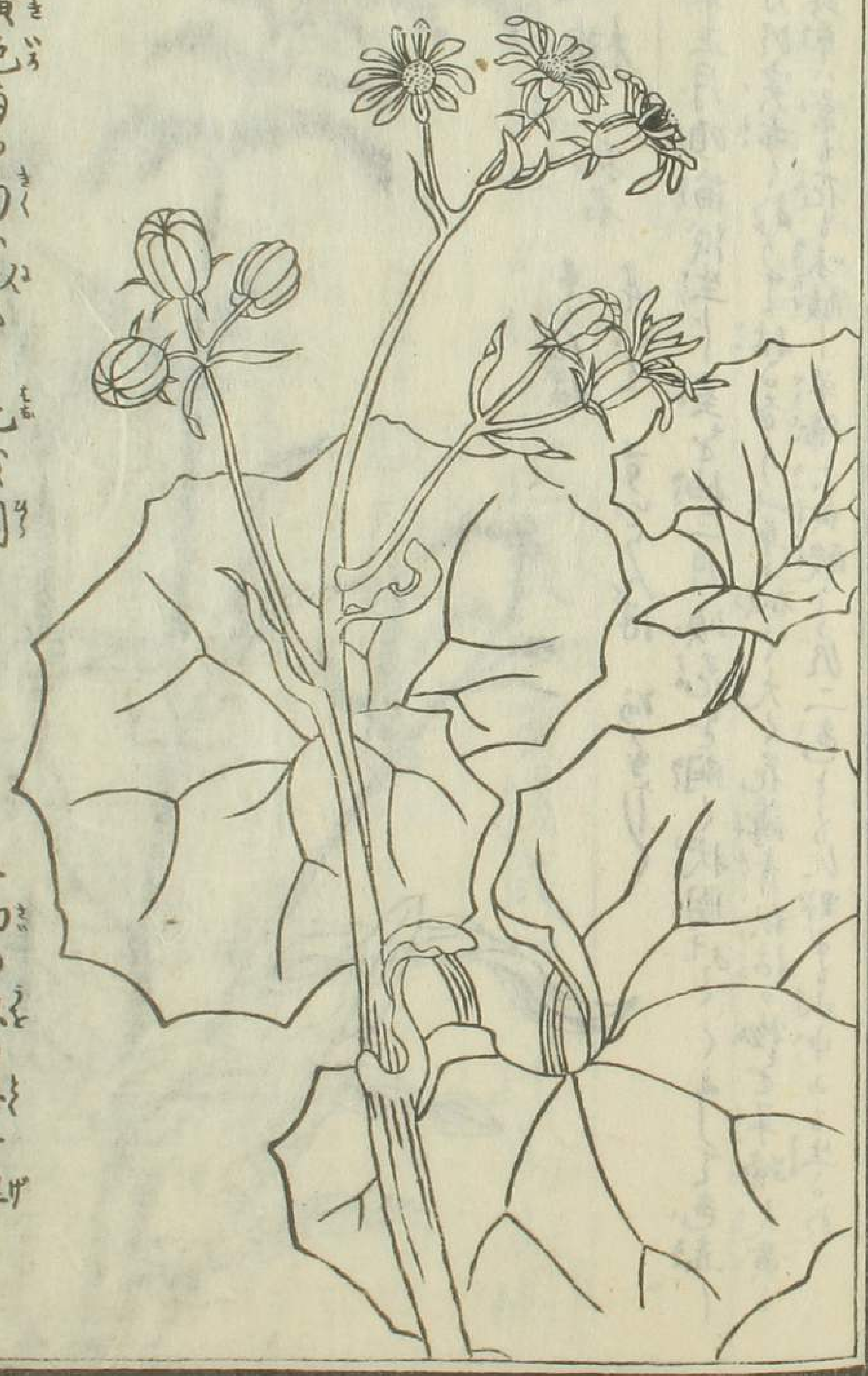
是を鎊にするを水にて服る○又方藍葉

圖説前の茶毒にあり搗汁を服てよし青黛薬店にありと

亦よし○又方人糞汁能諸毒を解○又方地漿を服すべし○又方香油多飲てよし○又方黒豆を煮て汁を取多服甘草を加て煎服極てよし此方最効あり或ハ升麻薬店にありを加ふるもよし

橐吾 和名 つハぶき 又 つハ 又山ぶき

此草多く人家庭の中に栽る葉ハ款冬に似て厚深緑色にて光澤あり款冬ハ葉薄く浅緑色にて光なし此草ハ冬も葉枯ずして茎に絲あり



秋黄色なる菊に似たる花を開き冬ハ其實房をなし一茎に數顆もあり

一切の魚の毒を解す鯉河豚の毒に中りたるに最良なり

酸模

和名 もんぼ すいを すいらんぼ ねつぎりし

此草正月頃苗を生じ茎を抽三月頃花を開く状圖のごとくにして色赤し六月比実赤くなりて枯るなり此草に似て大く花薄青秋枯る物を羊蹄大黄と云此草ハ葉も花も味酸し羊蹄大黄酸模の二色ともに野にも水中にも生るなり

産前急證

胎動

病状 妊娠の婦人胎氣和せざる或ハ夫れ爲に困られ胎動して腹痛絶入らんとするハ胎動やと名づく其證腰より小腹へかけ痛く心へ搶あげ急に救ざれバ墮胎す或ハ産門より血下る

療法 砂糖を白湯に拌服す○又方糯米二合煮く熟せる時分葱白根十四五茎ばかり入き

再煮て食ふべし○又方辰砂薬店にあり五分鶏子白三枚よくよく調あはせよく服すべし○又方當帰二匁川芎一匁水一杯酒一盃煎じて一杯半となし用ゆ○又方葱白を濃煎じて汁を取飲ましむべし○又方竹瀝中風の條に詳なり取り多飲しむべし○又方葡萄の根を採濃煎多く飲ば胎安

○妊婦八九个月の頃腹内動く子生とする八

療法 梁上塵やねの桁なり等に上のほこりなり 釜底墨釜の底のすをかり即なすぐおそとすり 右二品末となし酒にて飲べし○又蒲黄図説中巻金瘡の條に出たる二匁新汲水にて服すべし

○跌撲或ハ重き物を持擧胎安ぜず或ハ子腹中に死する事あり

療法 急に沙糖湯を飲べし○扨當歸二匁川芎一匁二品共に薬店にあり剉水に煎じ酒少許入用ゆ但し總て胎動あらば用てよし

胎漏

病狀 懐妊の婦人卒に産門より血下る事あり若房事を犯し血下るハ真胎漏と名づく總く此證ハ腹痛なし急に理せざれバ胎を堕す至る但し尿孔より血下るハ又別なり

療法 生艾を搗き汁を取り一合（生なるものなくバ乾もの乃絞）用ひべし阿膠（薬店にあり櫛手といふ透明もの上品なり用ひべし）一匁白礬五分水一杯半入一杯に煎じ服す ○又方生地黄（薬店にあり）

末にして一匁酒にて用ゆべし○又方蒲黄（圖說金瘡條下にあり）の一匁白湯にて用べし○又方鹿角屑にし（鎊又ハ鮫皮にてくまるべし）當帰（薬店にあり）二味各二匁水三杯を一杯半に煎じ用ゆべし

子癇

病狀 妊娠の婦人卒に項背共に强直く筋脈攣急口噤く痰盛にして昏迷或ハ手足搐搦し角弓反張心下氣上衝舌を長く出し人事をしらず暫くして醒復作を子癇と云此症救ひがたし若口より糞汁出るものハ必死なり

療法 先介保する人左に認る法にて心下の逆氣をおさへ且服薬を用ひ足心へ張薬をすべし

子癇病婦を介保する法

介保人前面状

〇先婦人を起し介保をする人ハ婦人の背へまハり右の脚を直にのべくをそり左の脚ハまげし屈膝頭にて婦人の背の七椎のへんを押付け左の臂の二ツにてと肘との間にて婦人の胸のあたりをうけくかくへ向けておしけりる、心持にすべし其手の腕にて婦人の肩をおさへると図のごとし

考べし

右をそくして右の手臂をとの握り拳にて婦人乃心下少し右わき方へよせて按付け下へさげ抑下す心持にすべし左の手ハ向へおし右の拳ハ押しおろし按合よし心會べきあり

介保人背面状

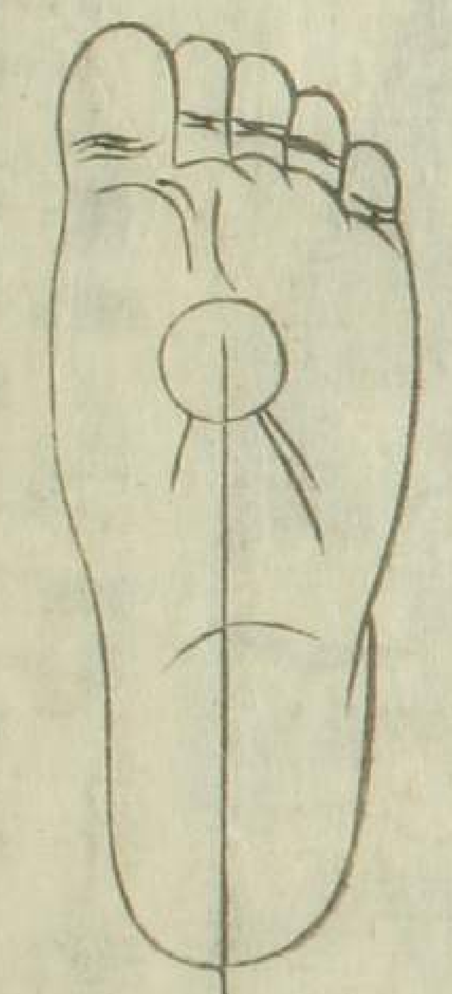
〇婦人の心下とハ乳の下此通りにてあばら骨のきハの少し右のきへ依る所を按て下よりはきあぐるように押しあぐべし

服薬 車蝦図後ニ出 煮て皮を去肉を取先手を以て婦人の唇を開き噤る歯を蝦肉を以て擦こと二三度ゑして其煮汁を口中に灌入て飲むべし口自開を俟て其肉を喫しむべし即效あり

○又方淡竹を伐火に焙て汁を取多飲しむべし○又方艾葉を鶏子大半分許を醋二椀入一碗に煎じ服さすべし○又方葡萄を水に煎じ汁を灌飲しむべし○又方熊膽五分白湯

みく濃と把辰砂 薬店にあり 五分を送下すべし

貼薬法 蓖麻子 薬店にあり 皮を去研砕て糊とおしまぜ紙にのばし足の心湧泉の穴に貼べし 紙ハ径り一寸四方許圓剪てよし湧泉の穴



くるま蝦

海中に生ず大さ七八寸より大なるハ形圖のごとし龍蝦に比バ細長して背に硬刺なし

殼薄くして灰白斑の紋あり煮ときハ色淡紅く變ず環曲して車の輪のごとし故に車蝦と言又此に似て小く三四寸なるものを芝蝦と言代用もちゆべし

妊婦腹痛腰痛

懐妊中何故となく腹痛事あり

療法 塩一撮濡紙につゝみ炭火の内に入て焼て赤くなりたるを酒或ハ白湯の内へ入て攪飲べし○又方急に黄汁なきときハ黄芪 薬店にあり 剉六匁粳米五合水にて煎じ服すべし

○妊婦腰痛又下血不止事あり 前條に載たる痛なし茲に載たるハ腰痛ありて別なり

療法 艾を酒或ハ氷にて煎飲べし○又方百草霜（釜底の墨なり）二匁 椶櫚灰（箒に作るを用るもよし）伏龍肝（竈の下の焦土なり）三匁 末として一二匁づゝ白湯に酒と童便を沖て右の藥を入攪服さしむべし○腰痛でありぬれバ大豆一合酒三合煮て汁を飲べし○又鹿の角の尖五寸火の内へ入れ赤く焼酒の中に入又焼く酒の内に入れ如此する事數度にして右の酒を飲べし

子鳴（子母の胎内にて啼なり）

妊身の婦人傾跌或ハ強に手を伸て高き處の物を取ることあれバ腹中鳴ことあり胎氣安からざる故なり

療法 其妊婦片時許の間鞠躬て居るべし自安し又ハ豆にても何にても席上へまきちらし其婦人に拾はせてよし 尤片時の間ひろはしむべし

臨産急證

凢催生の際用力太早を戒め惟忍痛くほどよく飲食を進め自然に任せ催迫の時を候べし

一二日又ハ四五日に至るとも妨なし然るを逼迫の候をまたず妄りに離身させしを用力をさせぬれバ難産に至る者おほかれバなり

○凢分娩逼迫の候ハ産母必臍腹急腰間重痛糞門逆急一身尽くあつくなり眼中火花如くなり胞水或ハ血倶に下るとき母用力く努力べし兒已に生る是其時いきまるなり

難産　胞衣不下を附す

證候

正産　兒の頭正直に出るなり　母して生下のぬるを碍

産といふ又兒先足を露すを逆産と云又兒先手を露すを横産といふ又兒母の後のうへ挂しを棖後といふ又兒母の左り右の方へ偏兒乃額角を露すを偏産といふ 右數證總く難産とれ服薬の方又

大抵通用れ故に今茲に一條とれ

服薬

麝香 薬店にあり 一銭水にて服すべし或ハ塩鼓 納豆 一兩舊青布に裹み火に焼黒くなりしを研末となし二味和匀て一匁許を秤錘を焼く

酒の中へ入れ淬て其酒にて服さしむ赤良

○又方 雲母 薬店にあり 末にして一匁温酒にて服さて麝香少許入最よし○又方 雞子三枚黄をかり酢を少し加へ酒にて服さて○又方 清油と蜜 薬店にあり と等分湯を少し沖て上のく調服しくらし○又方 古銭を火に焼赤して酒の中へ入れ其酒を服すべし○又方 人参末 乳香末 一匁 辰砂五分 何も薬店にあり 鶏子白一枚

生姜汁少入攪く服すべし ○又方益母草（図説 疔毒）
をの搗汁を煮て服す

手法

古より難産の諸證俱に手法あり然りと雖も歴練諳事人にあらざれバ軽易施しがたし且筆にハ其意を尽しがたければ唯其大略を載く猶其人をして心會しめ大謬なからんことを欲するのミ

○兒母ハ産門の左か右かへ偏く生まれぬるハ産母を仰卧せしめ軽く推て兒を上の方へ推あぐる心持にして兒の頭頂を正しくおさし置く後に産母努力ぬましバ兒生下

○兒産母の後ろのかたへ掛りたるハ看生人綿衣の類にて手を裹み穀道より外傍より軽くと兒の頭を推て正しくおさし置て用力廼し即生ぬ

盤腸産

臨産先子腸出て兒生下て後其腸收らん

療法

酢半盞新汲水茶碗に七分目入調停て産婦の面に噀べし両三度吹かけて尽く縮收

○又方半夏〈薬店にあり〉末にして産母の鼻孔へ管にて吹入べし嚏出て收る○又方太紙撚を麻油に浸し潤て燈を点て吹滅其烟りて産母の鼻の孔を薫べし即收る○又方萆麻子〈薬店にあり図説ハ急喉痺に出せ〉十四枚殻を去り仁ばかり研て膏のごとくし産母の頭頂中〈髮をわけ剃りて〉へ貼べし腸收まらバ急拭去べし

胞衣不下

兒生下時看生人産母の胸前をさすりて抱産婦も亦自分にても肚腹を緊抱べし胞衣下る○又右方にても不下ハ紙撚に火を点て吹滅其烟にて産母の鼻の孔を薫してよし○右法にても下ざるハ看生人左の手にて臍帯をとらへ右の手の指頭にて胞衣ある帯の着ぎハの所を探りしかと撮て緩々と引出すべし帯ハ極脆し手あらくすべからず手法ハ左の図と参考べし

服薬

海蘿 薬店にあり海草なり粘ありて人家日用する物なり を湯にひやしてとき或ハ煮て服すべし○又方五霊脂 薬店にあり

胞衣

鼠糞手といふもの用ゆべし一二匁末にして温酒にて用ゆべし○産婦自ら髮の毛を口に含めバ嘔吐の心付ありて胞衣自ら下るものなり○又方荷葉炒て末にし童子小便にて送り下すべし○又方牛膝二匁冬葵子一匁 二味薬店にあり 冬葵図説ハ諸物哽咽にあり 水に煎じ服す○又方紅花 干たる物薬店にあり 酒に煮く汁を飲てよし○又方鹿角末にして生姜湯にて一二匁を用ゆ

産後急證

血暈　産后忽然眼黒く頭眩して遂に神昏となるを病家に混く血暈と會え血がのぼりし抔いふことなれども此證二ツあり一ツハ産後下り物少くして悪血上に攻て右件の證を見るあり一ツハ産後去血過多なる故氣も又倶に脱し神氣昏迷する者あり二證原始式迥に違バ理法も亦大に懸隔つ誤るときハ死生掌を反も混同すべからず其證左の如し

血脱昏暈　産の時血脱下ると既に過多氣も就所依も失ひ氣血倶に乏昏暈になり人事不

省其面れ色白く眼黒閉て開かず口或開手足冷頭傾呼吸寂然たるハ血脱昏暈なり

療法 急に人参一二匁を濃煎し徐くと灌ぎ飲しむべし 此説人参を用きバ大に害ありと心得るハ誤りなり頓に虚したる澄人参にあらざれバ救ひがたし 此故に臨産乃婦人あらば預獨参湯を煎じ置て急に備ふべし 掛てハ間に合ずべし ○若手足冷バ附子 菜店 あり一匁を加てよし ○其症軽きものハ人参當歸川芎各一匁水に濃煎じ童便を加て用ゆべし 鹿角を黒焼にしバ兼用てよし

○又方人参茯苓一匁づゝ辰砂五分入て末めし白湯にて用ゆべし

血逆昏暈 産後悪露下ること少して胸腹脹痛し或ハ一時昏暈血壅痰盛に悪血心に上衝或ハ面赤色澤あり口噤頭仰頸直に人事を知ざるハ血逆昏暈なり

療法　急に婦人の頭髪を提起し火盆に醋を沸して醋気を婦人乃鼻中に冲入しめてよし或ハ小石鐵器の類を赤く焼て醋の内に投入其気を嗅しむれバ醒む扨其醋を産婦の口と鼻とに塗置し○又方舊漆器（旧椀などの類何にても漆に塗る旧物よし）或ハ乾漆を焼て其烟を人に鼻に薫て其気を吸しむべし○又方微醒を覚バ急に生鶏卵壹枚打破呑下さしむてよし若効なきハ童子の小便を多くのましくらし尚治せざれバ竹瀝を多く飲しむ但し又半夏を末となし管をもつて鼻孔へ吹入嚔を取てよし○又方騏驎血（薬店にあり致まて手と云ものよし色至く赤きを用べし）没薬（薬店にあり煉没薬と云を用べし）二味一匁づゝ末となし童便と酒と半分まぜあはして温め右の末薬を用ゆべし紅花（薬店にあり）の末又ハ蘇木（薬店にあり赤き色を染る蘇木なり）の末前のごとくして飲

てよし○又方欝金ㇾ末（薬店にあり黄色を染るに用ゆるものなり）炒黒して酢にて用ゆべし○又方荊芥（薬店）ありて末となし白湯にて用煎服亦よし

此證ハ前の脱證とハ違ひ人参など用ゆきバいよ〳〵あしく用ゆべからず

崩漏 血卒に大に下るを云

病狀 婦人俄に陰門より血多出ることあり脱血過多なれバ元氣接續なく死に至る急に救べし産後腹中鳴との崩漏あるをいふとのあり油斷すべからず

療法 先急に其病婦を側に臥傍人其背後に坐し病婦上にあげたる脚ハ長く伸させ下にふる脚ハ膝を屈て伸し出る上の脚ハ上へ

載て屈たる下の脚の膝頭を捉く傍人の手前の方へ拉よせ上へ向る病婦の尻臀は向の方へ押付置し如此するときは陰門際く閉ゆへ血自から停く出ぞ扱左の薬を頻り用べし薬を用て腹よ血止をとんく手を放置し左よ図あり考べし

服薬 麒麟血あり薬店よ焼く黒くし温水ふく服置し元氣乏くハ獨参湯方ハ上巻の中風の條よ出を用ゆ

癒し○又方木乃伊（茶店にあり布目ありく香高きものよし）五分末にして酒にて用ゆべし○又方荊芥の穂（茶店にあり）焼て黒し細末となし童子は小便にて服す癒し○又方槐花（図ハ中巻吐血の條にあり）一両百草霜（釜の墨なり農家の物よし）半両末となし秤錘を焼赤くして酒の中へ焠く其酒にて一二匁を服すべし○又方蒲黄（図ハ中巻金瘡の條に出す）二両水に煎じ服す○又方乱髪（わかきものよし油気洗く去るべし）

雞子は大火に焼て灰とし百草霜一匁綿をめんるいはふ一匁焼て灰になし末となしてまいらすり温酒又ハ白湯にて服すべし○又方大薊（図ハ上巻疔毒の條に出す）の根を採搗く汁を温て服べし○又方棕櫚の皮黒焼にして末となし米飲にて用べし

小兒急證

初生卒死

小兒初生て即ニ死する者あり急ニ小兒の口中を視へし懸壅れ前上腭小泡ありて石榴子のことく成るものあり急ニ指をもつて摘破り悪血を出し布をもつて拭去て其あとへ髪毛を焼灰となし掺べし甦者あり若悪血兒の咽に入バ即死

撮口　はやづきむしなり

病状　其初何事なく啼く漸くて面色黄赤氣促啼聲出ず舌強て唇青口を撮く嚢れ口をよせたるが如く乳を吮ず或ハ白き沫を吐手足冷ハ最悪證なり凡此證一臘の内に見るれバ十に一生なし

療法　小兒の齒齦上を看べし小泡子ありて其状粟米のごとくなるべし急に鍼をもつて

挑て悪血を出すべし其のちへ薄荷圖説下にあり茶店にあり乾たるハ生なるハ搗絞りて汁を取乾きたるハ煎じたる汁にて好墨を磨其兒の母の頭髪少許取て手の指に裹て件の墨を鰓口内に擦さし後一時程の間乳をのましむべからず○又方先歯齦に生する所の小泡子を針にても指の爪にても掻破り其のちへ生蜜を點て効あり○又方熊膽を

湯にて溶て灌ぎませてよし○又方牛黄茶店にあり爪の甲に乗て付て落ざるもの眞なり五六分末となし竹瀝取法中風の條にありにて調灌入さし○又方蝸牛圖説上巻疔毒の條にあり研爛口の内へ塗べし

灸法 小兒の兩の乳より臍へ斜對に線を張て斷截其線を二つに折て其正中に墨記をさすべし是灸穴なり左右供に二穴となる扨此二穴の最中に又墨にて記を付是ハ灸穴にあらず

此記の大許一層て其上よ一穴を點す是灸穴なり都合三穴となる一ヶ處よ三壮或ハ七壮灸すべし左よ圖きり參考亟し

撮口臍風灸穴之圖

●此ハ灸穴の印
○此ハ假点の記

薄荷

人家よも栽置又野邊よもあり

二月の季宿根より苗を出し葉對生茎方淡紫の小花を開葉を採揉て嗅ハ涼く辛此香あるものなり

香氣あるも此なり茎葉花實同しと云ども用ゆべからず

臍風

病状 面赤喘急啼聲出ずして臍脹て突起腹脹満て日夜啼く乳を吮ことならず或ハ搐搦口噤く撮り凡臍の邊青黒ハ治すべからず

療法 臍腫るハ荆芥（薬店にあり）を煎じ汁を取て洗浄葱の葉を火の上にてよく炙冷を候く指甲にて刮薄して腫る處へ貼べし○又方 田螺三箇に麝香（薬店にあり）少許を入搗爛く臍

上に搭須臾して再ぬり易て腫消る○此外治法幷小灸理前の撮口に同じ○又方大蒜薄切臍上に灸七壮程すべし

初生便閉

初生の児大便小便ともに不通腹脹絶いらんとするハ忽にす危うし

療法 婦人おして温水にて口を漱小児の前後心並に臍下と手足の心と七ヶ処を吸哂ること頻にすべし凡哂こと三五次にして再口漱て更右の七ヶ処赤くなる程口にて哂べし両便自通ず○又方生葱の白根を搗く汁を取

乳汁を等分に調小兒の口中に抹く乳をの
たへ吮下しむれバ即通ず

初生丹毒　ちやらさなり

初生小兒遍身むらくと赤く腫ることあり
是を丹毒と言 俗にあかさと云 此毒腹に入バ死す
療法 赤暈せし周匝を鍼にて刺て悪血を出
し其跡へ芭蕉 人家園庭に栽るものゝ是なり の葉にくゝと
茎ぬくも搗汁を塗置し或ハ赤豆丸末鶏
卵清にて和塗もよし○又藊豆末二匁半
大黄一匁生薄荷汁蜜少許に匀て塗置し

○又方麻油を塗てよし○又方馬齒莧（圖説中巻）
咬傷に出も搗く汁をぬりてよし

初生口噤不開

療法 天南星（薬店にあり）末一錢許に龍腦（薬店にあり）少許を入研匀生姜の絞汁に調へ指先にて兒の牙齦に擦べし立ろに開くなり○又方牛黄薬店にの末五六分竹瀝（取法上巻中風に見ゆ）にて用てよし

驚風

急驚漫驚の二證あり又疱瘡の初り昏悶あるを附なり

急驚風 牙齒をくひしめ竄視手足搐搦或ハ反張或ハ壯熱或ハ熱なくて此證を發する者あり且大抵此證を發するときハわつと叫聲をあげて目を引つける者あり併ながら初より壯熱ありてうとうと昏睡鼾をあげまどふ惟手足を搐搦して後に引つく氣もあり此を急驚風と云なり

療法 凡驚風昏悶不醒ハ急に熊膽を湯にて
とき兒の口を開き多く灌飲しむべし○
又方辰砂 薬店にあり 一味温水に和く用ゆ亦し○又方
鶏冠雄黄 薬店にあり俗に雞冠石といふ 等分に加ふ亦良○又方
青礞石 薬店にあり を水にて磨て汁を灌ぎ飲しむ
べし○又方涎潮甚しきハ鐵粉 金屋よりこなるの 辰砂
薬店にあり をよくませく薄荷の煎汁にて灌のま
せてよし○又方蝸牛を研細にして何にて

も服薬を中に入れ用ゆ○灸ハ章門或ハ湧
泉二穴ともに図説上巻中風に出す を穴七八壮より十五壮に至
るべし若聲の出ざるハ聲の出るまで灸
してよし
右の證候并に理法ハ驚風實證に施くべし
但きなり實證とハ固無病なる小兒の風
寒に感じ氣化よろしからず或ハ乳食
停滯て此證を發し又ハ生人異物を見

驚怖るに因く亦此證を發るなり慢驚風ハ此に似たれども虛證なり別に證理あを左に載す

慢驚風 大抵大病の後或ハ大便瀉利或ハ吐乳食を數日乃後に俄于昏悶驚搐竄視等れ證あり

療法 先大抵艾灸をよしとし神闕氣海圖說脱陽の條にあり章門圖說中風の條にあり天樞圖說脱陽乃條にありの

諸穴に灸すること數壯するべし扨熊膽を獨參湯にてとき口へ灌ぐべし或ハ手足冷バ參附湯上巻中風の條に出すにてとき口へ灌與ふべし醒て後も右れ方を用ひ醫れ來るを待べし○或ハ痰盛なるハ甘草一味多少にかゝハらず煎じ飲しむべし

疱瘡初發昏冒 狀驚風のごとくなるあり混淆にすべからず須其初乃證ハ呵欠いく噴嚏し

て耳れ尖冷となるなり 扨昏睡面赤顋頬亦赤
し乍涼乍熱を發するなど如斯にして俄
に驚風となる 驚搐ハ痘瘡の初候なり

療法 漫に灸をすべからず鍼をよしとす○
蟬の脱殻を細末にし飲乃とり湯或ハ
白湯に匀灌のましむ但し其侭水に煎じ
用るもよし○又方青黛水に調服しむ

搐鼻法 半夏薬店にありの末鼻に嗃てよし皂
莢薬店にあり詳に上巻中風に図説ありの末抹等分に加搐て
よし噎いだるをよしとす

走馬牙疳　はくさあり

病状　歯齦損爛或ハ腫紫黒色ニ成歯縫より
鮮血出口内臭氣あり毒深ハ臭氣も亦甚し
身ニ熱ありて甚しきハ歯落唇鼻顋頬までも
攻蝕く脱去ニ至る遅きハ死に至る
凡疱瘡麻疹或熱病時毒等患ふる後息
臭口中臭氣あるハ其毒清解せさるなれバ
早く良醫を迎て療理を請べし延遅すれバ

ハ此病となる可恐

療理 先河蚌(和名どぶがひ又ハ貝 蜆の條に圖說あり)煮て汁を取り患處を洗ふべし又淡塩湯或ハ米泔水にて洗ふもよし洗漱したるあとへ後の藥を搽塗べし○尿桶中の白塗を刮とり火にて焙乾末となし麝香(薬店にあり)少許入て研あはせ患處へ塗べし龍脳少許加へ用ゆるもよし右此方中へ五倍子(薬店にあり)をくろぶしなり炒黒し銅青(あかゞねのさび 薬店にあり)等分末となし加へ用ゆ最よし○又方蜣蜋(糞缸中に生ずるうじむしなり尾のながき蟲なり用べし)數箇取りて焼灰となし麝香少許入て牙齦に擦又よし○又方白姜蚕(このひこ くさりておのれと死たる也の薬店にあり)或ハ蠶脱紙(蚕のたまごをうむる あとのかみなり)を焼く末となし麝香少許入れよく研まぜて患處に擦べし○又方麝香黄檗青黛雄黄末となし乾摻べし若患處既蝕損死肌有

綿を筋様の物乃端へ纏薬を醮して蝕損ある死肉へ擦却て且軟帛にて悪血を拭ひ去りて右の薬を摻施し此薬を用て効あるハ定粉女子の用るおしろひなり薬店にてハ唐土と云半両を加へ同く研て用ゆべし用様ハ前の方と同じ

服藥 大黄 青黛 乾地黄三味倶に薬店にあり剉て煎じ服或ハ末となし白湯にて調へ服もまたよし

廣惠濟急方巻下

植田文敬 通叟 寫字

廣惠濟急全方三卷凡一十類八十六門門發以證證繫以方而草卉之形狀與灼艾之孔穴指示以繪圖凡暴疹卒痾呼吸存亾之際醫不及延方藥至簡至便而扶危顛於逡巡拯苦楚于揮霍者蒐羅殆盡焉乃是家嚴數十稔間潭心研精博訪廣搜歷試經驗之所得非趙李敷歐士海胡其重等書徒收採前人成方之比也俾此書周布寓内城市郵野家講戶明備旦夕不測之急則免夭大枉

咸遂生生之樂矣耳小子元簡受家嚴之命
反覆校訂以授剞劂氏竊喜家嚴壽衆之誠心
永賛
國家好生之至仁以弗泯乎無極因書箕尾
爾若夫撰輯顛末佐野中野二序悉之元簡
又何言焉
寛政二年仲秋前一日
不肖男元簡百拜書

醫學館御藏板

衛生彙編初集

黄帝蝦蟇經一卷
此經ハ針灸ノ書ニメ漢代ノ物タルヿ疑ベキナキモノ也
唐以來彼土ニ絶タルガ幸ニメ此方ノ今ニ存シタル奇
古ノ珍編ナリ

本草衍義二十卷
此書モ彼邦ニ流傳少ク李東壁モソノ原本ヲ見ズ
故ニ漏載スルモノアリ今刻スルトコロハ宋板ヲ祖トシ

聿修堂藏版

挍スルニ元板及ビ諸家所引ヲ以テスルモノ也實ニ發明スルヿ多ク治療ニ助アルノ書ナリ

嚴氏濟生續方　十巻

嚴氏ノ書ハ明約ニシテ世ニ益アルヿ人ノ知ルトコロナリ此續方ハ前方ノ未逮ヲ補タルニシテ篤論良方亦少カラズ世ニ久ク傳本ナカリシガ近来金澤文庫ノ古鈔本出タリシニ因テ朝鮮ノ醫方類聚ヲ以テ挍補ナヒシモノナリ

醫學館御用御書物師　萬笈堂英平吉

江戸本石町十軒店萬笈堂英平吉郎蔵版醫書目録

金匱要略輯義　全十冊　大本

東都醫官桂山多紀先生歴朝諸家ノ説ヲ集メ及千金外臺等ノ書ニ引トコロマデノ異同ヲ考校シ且先生ノ按ヲ各條ノ下ニ附ス金匱ノ諸説コノ書ニモルヽ㕝ナシ實ニ註家ノ大成也

古方丸散方　全一冊　小本

東洞吉益先生著ス所也此書往年田信菴先生校正上木ス是蔵マタ東洞家ノ今量考ヲ附シ更ニ訂補刻ス

丸散兼用方機　全一冊　小本

此書ハ東洞先生作ニテ金匱傷寒ノ方ニ機變妙用アルヿヲ記シ東洞翁常用ノ方也臨病ノ機變コノ書ニツキタリ且丸散兼用方書也

一本堂醫事説約　全二冊　小本

此書ハ香川先生常ニ坐右ニ於テ験セシ方ヲ集録ス往ニ薬選行餘醫言等ノ書既ニ行ルヽトイヘ𪜈薬論病論ノミニテ方ヲカク今コノ書ヲ合テ全備タリ香川家ノ四剤ヨリ始メ先生ノ定方漏スヿナシ

上池秘録 小本一冊 西川國華先生輯

同続編 全一冊 同作

同三編 全一冊 同作

同四編 全一冊 同作

此書ハ古今丸散ノ方ヲ集ム先大人家ニハ奇應丸一粒金丹婦人家ニハ龍王湯安神散小兒家ニハ萬金丹龍角圓古方家ニハ紫圓備急圓ノ類ヨリ始メ各家ヲ部類シテ且諸家経験ノ奇方ヲ巻末ニ附ス

外科上池秘録 小本一冊 同作

此書ハ外科ニ用ル所ノ丸散幷ニ膏薬ノ方ヲ集ム外科方書最第一也

傷寒方 一冊 小本 東都医官 多紀法眼閲 中澤養亭作

此書ハ傷寒発病ノ初日ヨリ五日迄又五日ヨリ十一二日迄ト初メヨリ廿日餘ノ間ヲ分ク薬方ヲ著シ其間ニハ或ハ下利後発汗後ナド色々ノ證ヲ著シ各條ノ下ニ薬方ヲ著ス附録ニハ山田正珍先生ノ温疫辨又ハ辟温方ナド委ク出ス傷寒ノ方此書ニモルヽヿナシ

救急選方 二冊 小本

東都醫官多紀先生輯ムル所也先生ノ博覧廣才世ノ知トコロ也此書古今医籍中ヨリ救急ノ奇方輯ム實ニ先生ニアラズシテ此書ヲ作ル事能ハズ四方ノ医家必ズ葉篋中ニカクベカラズ

醫略抄 一冊 丹波雅忠著 多紀擽窓先生挍

此書ハ今ヲ去ルヿ殆ド七百年前ノ物ニシテ晋唐医書卅四部ノ中ヨリシテ單捷ノ方ヲアツメ急病ヲ治スルタメニ撰シタル書也其方ミナ奇験ノ方ニシテ且所引ノ書多クハ今ニ傳ザル本ニシテ千金外臺ヲ讀ノ大ナル助トナリ古方ヲ講スルノ人必讀ノ書ナリ雅忠ハ日本扁鵲トイハレシ人也

廣恵濟急方 蔵板 三冊 多紀藍溪先生著

此書ハ専ラ窮郷僻壌或ハ旅中ナド医者ニ乏キ処ニテ急卒ノ病アル时ハ坐ニテ驚ルヽヿヲ憂ヘ作ラレシ書ニテ平假名ニテコレヲ書シ一二味ニテ奇効アル方ヲヱラビ尤手近ナル草木蟲魚ノ類ヲ専ラトシ其形状ヲ図シ又縊死溺死等ノ其手術ヲヱガキ又灸点ノ方モ委ク其図ヲ出シ大人小兒急ナル大病ハ言ニ及バズ諸ノ毒ニアテラレ犬ノ咬ミ蟲ノサシタルナド或ハ火焼ナドマデモ如何ヤウ俗人ニテモ此書ヲミル时ハ其療治カタ一目〆シルベク誠ニ医者ヲ待ズ〆命ヲ救ヒ苦ヲ免ルヽヿヲ得ル之故ニ人ミ不時ノ用意ニ一部ツヽ所持セズンバアルベカラザルノ書之而ソノ方ハ勿論古今ノ方書ヨリヱラビ出シ一ミ試験ノ良法ナレバ医家ト云圧豈コレヲ缺ベケンヤ

傷寒論輯義 七巻 十冊 多紀櫟窓先生著

古来傷寒ヲ注スルモノ多ハ古書ヲ讀ムノ法医書ヲ講スル式ヲシラズ多ク意ヲ用テ恣ニ改竄ヲ加ヘ或ハ紙上ノ空談ノミニテ實用ニ益アラズ先生ノ此書ハ四十餘部ノ注家ノ内ニヲイテ其長ヲヱラビ短ヲサリ又古書ニヨリテ異同ヲ正シ其疑シキ者姑ク諸説ヲ引テ敢テ臆改セズ専ラ文理確當ニシテ義理正平ヲ要トシ又古来医書ノ中ニヲイテ仲景ノ義ヲ敷衍シ仲景ノ意ニヨリテ巧ナル療治ノハナシ或ハ仲景ノ方ヲ好ク活用シタルヿ又仲景方ニ加減タル方又仲景ノ遺意ヲ発明シタルヿ凡傷寒論ニアヅカリ治療ノ助ニナルヿハ一ミ毎條ニ附録〆臨證處方ノ便トナス實ニ傷寒論ヲ解シ傷寒論ヲ活用スルノ第一ノ書ニ〆古来注家ノ企及ベキニアラザルトコロ之

脈學輯要 三巻 二冊 同前

此書ハ寸関尺三部ノ位ヨリ趺陽人迎ノ診法平人ノ脉病ノ深淺生死ヲ决スル法二十四脉ノ形状婦人小兒ノ脉及ビ八怪脉ニ至ルマデ古来脉書ノ精英ヲヱラビノセ又コレヲ古經ニ徴シ實驗ニタヾシ以テ按語ヲクハヘ凡脉ニアヅカルヿ此書ニノセザルト云ヿナク古来ヨリノ脉書此書ホト切正ナルハナシ實ニ医家第一必用ノ書之

醫賸　三巻附録一巻　三冊　同前　蔵板

此書ハ先生ノ隨筆ニ〆神農嘗藥医學醫科ナドヨリ〆何ト云ヿナク茶品ナドニ至リ附録ニハ募原屠蘇ナドノ詳攷ヲアゲ医書古来ヨリノ疑義ヲ辨明シ人ノコレマデ知及サヌヿヲ見イダシ一々攷證ヲナシ医学ノ助トナスモノ是先生久年ノ積ムトコロニシテ一時ニナルモノニアラズ又何レモ医者知ラズンバアルベカラザルヿニ〆無益ノヿナシ世ノ好テ著述ヲナシ博ヲ貪テ雜駁ニナルモノト同日ニ〆論ズベカラズ誠ニ古今未曾有ノ書ニ〆特リ医学ノミナラズ凡学者此書ヲミバ益ヲ得ルヿ少カラザル之

素問識　八巻　同前

靈樞識　六巻　同前

内經ハ先生ノ家學ニ〆此書ノ精密ナルヿ世人ノ能知トコロ之況ヤ今刻スルモノハ先生晩年ノ定本ニ〆攷證詳密マタ餘蘊アルヿナシ醫道ノ大本ヲ明ニセント欲ルモノ豈此書ニ據ラザルベケンヤ

醫方挈領

此書ハ方ノ祖ヲアゲ（四君子湯四物湯ノ類ノ如キ是ナリ）ソレニ加減ナシタル類方ヲ集タルモノ之一々出典治證ヲアゲ王良璨ノ小青嚢施沛然ノ祖剤ナドニ比セバソノ精博数倍ノ実ニ藥籠中缺ベカラザル書之

痲疹心得　痲疹輯要方　痲疹纂類　各一巻　合刻二冊　同前

心得ハ先生数次經驗ノ治術ヲ詳ニ國字モテ録シタル書ナリ輯要方ハ諸家ノ名方ヲ集〆纂類ハ諸説ノ要ヲ摘タルモノニ〆コノ三書アリテ治疹ノ事拾芥ヨリ易シトイフベシ

櫟窓類鈔　八十巻　同前

此書ハ儒書ノ中ヨリ醫ニアヅカリタルヿヲ摘出シ類ヲ以テ纂録シタルモノ之醫ノ政令ヲ始トシ證治方藥ノヿハイフニ及ズ書目醫傳並ニ詩文ノ類マデモ悉ク採入セズトイフヿナシ先生ノ博覧古來醫家ッノ比ナク此書亦天下所未曾有ノ盛挙ニ〆其益甚廣シ誠ニ不可無ノ鴻寶ナリ

櫟蔭先生文集　五巻
先生ノ文ハ敢テ巧ヲ求ルニ意ナシトイヘ𪜈能俗習ヲ脱メ自ラ雅麗ナリ且醫書ノ攷證證治ノ論説等發明スルトコロ多ク其中ニアリ

醫籍考　百巻　多紀栁沂先生著
此書ハ朱竹垞經義考ニ倣テ古来醫書ノ目録ヲ類列シタルモノニテ歴代ノ史志及ビ百家ノ書ニ就テ巻帙序跋ヲ挙ゲ並ニ作者ノ履歴ヲ訂シ存佚未見ヲ表シ書ノ佳否道ノ源流燦然トメ明ナリ

疾雅　三十巻　同前
醫ノ事ハ病名ヨリ繁雜ナルハナシイマ先生博ク攷覈ヲナシテ正俗ヲ訂シ異同ヲ辨シテ以テコレヲ約ニ帰セシムルノ書也

名醫公案　五十巻　同前
此書ハ諸家治驗ノ巧妙ナルヲ纂録シタルニメ古人臨證處治ノ曲折ヲ會得シコレヲ今日ニ運用セントスル此書ヨリ善キハナシ

難經疏證　二巻　同前
難經ノ注ハ頗多ケレ𪜈大抵迂遠ニメ且㸔古ニ疎シ今先生諸注ノ的切ナルヲ撰ビ更ニ攷證ヲ加ヘタル書ニメ櫟窓先生ノ醫經諸解ト並セ讀セズンハアラザルモノ也

名醫彙論　八十巻　多紀茝庭先生著
古人ノ病論異同ノ説悉ク載ズトイフヿナク一病ニ就テ名義脉法源因證候治法ヲ析タル大成ノ書也

傷寒論述義　一巻　同前
此書ハ輯義ノ餘意ヲ發明メ三陽三陰ノ大義変壊ノ諸候ニ至ルマデ類論辨列ヲナシ仲景ノ條理ヲシテ一目了然タラシメ治術ニヲイテ明切ナル書ニメ敢テ立言ニ急ナルモノニアラズ

傷寒廣要　十二巻　同前
此書ハ古人傷寒ノ治術ニヲイテ切正ナル論方ヲ類録シタル書ナリ輯義

ヲ羽翼ノ経意ヲ擴充シ事實ニ大有用ノモノ之

證治通義　二十巻　同前

此書ハ病因診察辨證ノ要領用薬治病ノ法則方剤薬物ノ理蘊マデ諸家ノ精説ヲ摘出シ一々攷証ヲ加ヘ醫ヲ学ブモノヲシテ早ク正路ニ入シムルノ秘帙之

傷寒六経志　一巻　加藤循龍先生著

三陰三陽ヲ以テ更ニ細分ヲナシ一百十三方ヲ配列シ方ゴトニ因證脉治ヲ掲ゲ剤ノ大意ヲ示タル書ニノコレヲ藥籠中ニ藏テ至テ便利ナル書ナリ

產科指南　二巻　多紀茝庭先生閲　大牧周西先生著

此書ハ賀川氏ニ本キテ國字モテ其手術証候治法等ヲ演説ナシタルモノ之先生ハ產術ニ妙ヲ得タル人ニメ數十年間経驗スルトコロヨリメ賀川氏ノ未逮ヲ發スルヿマタ多シ且其論説至テ深切ニメイカナル初学トイヘモ暁ヤスカラシム誠ニ良師ニヨラズメ產術ノ秘訣ヲ得ルノ鴻寶ナリ

三都
發行
書林

京都三条通升屋町　出雲寺文次郎
大坂心斎橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博労町　河内屋茂兵衛
同　安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同　日本橋通二町目　山城屋佐兵衛
同　壹町目　須原屋茂兵衛
同　淺草茅町二町目　須原屋伊八
同　本石町十軒店　英大助
板